



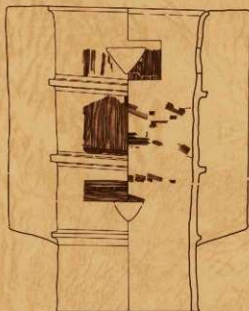
鳥取県鳥取市

布勢総合運動公園整備事業第2期計画に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

寄
贈

里仁古墳群

〈32・33・34・35号墳の調査〉



1985

財団法人 鳥取県教育文化財団

序 文

里仁古墳群は、鳥取市の市街地西方に位置し、今回調査した4基の古墳は、西の眼下に湖山池を、北は千代水平野を経て日本海が一望できる丘陵の尾根に連なって築造されていた。

昭和60年に開催される第40回国民体育大会の主会場が隣地に設けられたことに伴い、会場の周辺一帯が布勢運動公園として整備されることから、県の委託を受けて発掘調査を行ったものである。

調査の結果、4基とも古墳時代中期の方墳で、埋葬施設は箱式石棺、木棺、埴輪棺等が検出された。特に注目されるのは罫付壺円筒、壺埴輪、家形埴輪及び多数の壺橋が出土したことで、因幡地方における古墳研究の一助ともなれば幸いである。

おわりに、この調査にあたり全面的に御協力いただいた地元の皆さんをはじめ、関係各位に対し心から感謝し、厚くお礼を申し上げます。

昭和60年3月

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西尾 邑次

東宗像遺跡正誤表

頁	誤	正
1 P 5行	「陰田遺跡調査団」	「米子バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団」
9行	「陰田遺跡調査団」	「米子バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団」
124 P 挿図 187	同筒埴輪	円筒埴輪
挿図 188	周 橋	周 溝
142 P 13行	天井石	蓋 石 (2ヶ所)
14行	天井石	蓋 石
159 P 挿図11、番号6備考	1 部末調査	1 部末調査
169 P 挿図 254	東宗像遺跡地形横断面図	東宗像遺跡地形横断面図
205 P 挿図 285	西5号横穴出土遺物実測図②	②削除

例 言

1. 本報告書は1984年度鳥取県布勢総合運動公園第2期整備計画に伴う鳥取市里仁、大橋に所在する里仁32・33・34・35号墳の発掘調査記録である。
2. 出土遺物の整理は松岡朋子、神矢紀子、吉次恭子の協力を得て、調査員が行なった。
3. 遺跡、遺構の実測は株式会社建設技研の協力を得て調査員が行なった。遺物の実測は調査員が行ない、小谷春江、桑崎知早子が補助した。
4. 遺跡、遺構の写直撮影は調査員が行ない、遺物の撮影は中原が行なった。
5. 図面の浄書は主に青木ちえ子が行ない調査員が補足した。
6. 本報告書の執筆は調査員が分担して行ない、中原が編集した。
7. 出土遺物、図面等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は将来的には鳥取市に移管する予定である。
8. 32号墳第1号埋葬施設第2号石棺出土の人骨については、鳥取大学医学部解剖学教室井上貴央先生に鑑定を依頼した。また33号墳出土銅造鉄斧の化学分析・鉄器のX線撮影は奈良国立文化財研究所町田章、沢田正昭、秋山隆保の各氏に指導・協力をいただいた。
9. 現地での発掘調査において奈良大学教授水野正好氏の御指導をいただいた。
10. 本誌に掲載の地形図は国土地理院発行の5万分の1地形図「鳥取北部」「鳥取南部」を使用した。
11. 図中の方位は磁北をさす。
12. 発掘調査、整理作業中、下記の方々には御指導、御助言をいただいた。
赤木三郎、秋山隆保、小田富士雄、岡崎晋明、勝部明生、加藤隆昭、久保優二郎、黒崎直、真田廣幸、清水真一、高木恭二、寺西健一、中野知照、根鈴智津子、土井珠美、野田久男、平川誠、平勢隆郎、船井武彦、松本岩雄、三宅博士、森下哲哉、柳沢一男、山名巖（敬称略、五十首順）
13. 発掘調査にあたって便宜をはかっていただいた土地所有者・地元の方々に謝意を表します。



写真1 調査前風景



目 次

序

例 言

目 次

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯	(中原)	1
第2節 発掘調査の経過	(//)	1
第3節 調査方法と体制	(山橋)	2

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	(中原)	3
第2節 歴史的環境	(//)	4

第3章 調査の内容

第1節 調査の概要	(山橋)	7
第2節 里仁32号墳	(//)	8
第3節 里仁33号墳	(//)	25
第4節 里仁34号墳	(中原)	46
第5節 里仁35号墳	(//)	50
第6節 古墳以外の遺構	(山橋)	59
第7節 遺構外出土遺物	(//)	62

第4章 遺構と遺物の検討

第1節 墳丘・埋葬施設について	(中原)	63
第2節 遺物について	(//)	64
第3節 まとめ	(//)	69

第5章 付 論

第1節 里仁32号墳第1号埋葬施設第2号石棺より検出された人骨について	70
-------------------------------------	----

鳥取大学医学部解剖学第2講座 井上貴央

挿 図 目 次

挿図1 里仁古墳群測量杭設定図	2
挿図2 里仁古墳群の位置	3
挿図3 鳥取市北西部遺跡分布図	5
挿図4 32・33・34・35号墳位置図	7
挿図5 墳丘実測図	8
挿図6 墳丘土層断面図	9
挿図7 32号墳墳丘模式図	10

挿図8	32号墳掘り割り内円筒埴輪等出土状況図(A)	10
挿図9	32号墳掘り割り内家形埴輪等出土状況図(B)	10
挿図10	32号墳第1号埋葬施設(第1・2号石棺)蓋石検出状況及び土層断面図	折込
挿図11	32号墳第1号埋葬施設第1号石棺実測図	11
挿図12	32号墳第1号埋葬施設第1号石棺出土壺実測図	11
挿図13	32号墳第1号埋葬施設第2号石棺実測図	12
挿図14	32号墳第2号埋葬施設実測図	12
挿図15	32号墳第3号埋葬施設実測図	折込
挿図16	32号墳第3号埋葬施設罎付壺円筒埴輪実測図	14
挿図17	32号墳第3号埋葬施設出土罎付円筒埴輪・円筒埴輪実測図	15
挿図18	32号墳第3号埋葬施設出土埴輪実測図	16
挿図19	32号墳出土埴輪実測図①(円筒埴輪)	17
挿図20	32号墳出土埴輪実測図②(円筒埴輪)	18
挿図21	32号墳出土埴輪実測図③(朝顔形埴輪)	19
挿図22	32号墳出土埴輪実測図④(壺形埴輪)	20
挿図23	32号墳出土埴輪実測図⑤(壺形埴輪)	21
挿図24	32号墳掘り割り内出土家形埴輪実測図	22
挿図25	33号墳墳丘実測図	25
挿図26	33号墳掘り割り内壺形土器・鉄斧出土状況図	26
挿図27	33号墳墳丘模式図	26
挿図28	33号墳墳丘土層断面図	折込
挿図29	33号第1号埋葬施設遺物出土状況図	27
挿図30	33号墳第1号埋葬施設実測図	28・29
挿図31	33号墳第1号埋葬施設出土鉄器実測図①	30
挿図32	33号墳第1号埋葬施設出土鉄器実測図②	31
挿図33	33号墳第1号埋葬施設出土鉄器類実測図③	32
挿図34	33号墳第2号埋葬施設実測図	33
挿図35	33号墳第2号埋葬施設出土鉄器実測図	33
挿図36	33号墳第3号埋葬施設実測図	34
挿図37	33号墳第4号埋葬施設実測図	35
挿図38	33号墳第5号埋葬施設実測図	35
挿図39	33号墳出土鋤造鉄斧実測図	36
挿図40	33号墳掘り割り内出土土器実測図①	37
挿図41	33号墳掘り割り内出土土器実測図②	38
挿図42	33号墳第3号埋葬施設出土罎付円筒埴輪実測図①	39
挿図43	33号墳第3号埋葬施設出土罎付円筒埴輪実測図②	40

挿図44	33号墳第3号埋葬施設出土円筒埴輪実測図	41
挿図45	33号墳第3号埋葬施設出土埴輪実測図	42
挿図46	33号墳第4号埋葬施設出土罽付円筒埴輪実測図	43
挿図47	34号墳墳丘実測図	46
挿図48	34号墳墳丘土層断面図	47
挿図49	34号墳第1・2号埋葬施設実測図	48
挿図50	34号墳第3・4・5号埋葬施設実測図	49
挿図51	35号墳墳丘出土土器実測図	50
挿図52	35号墳墳丘実測図	51
挿図53	35号墳主体部石棺粘土被覆状況図	52
挿図54	35号墳墳丘土層断面図	折込
挿図55	35号墳主体部石棺蓋石検出状況及び土層断面図	折込
挿図56	35号墳主体部石棺実測図	53
挿図57	35号墳主体部石棺内遺物出土状況図	54
挿図58	35号墳主体部石棺外遺物出土状況図	54
挿図59	35号墳主体部石棺出土鉄器実測図	55
挿図60	35号墳主体部石棺出土堅柵実測図	56
挿図61	35号墳主体部石棺出土玉類実測図	57
挿図62	第1号木棺墓実測図	59
挿図63	第1号集石遺構及び出土土器実測図	60
挿図64	第2・3号集石遺構実測図	61
挿図65	遺構外出土遺物実測図	62
挿図66	調査区全体図	折込
挿図67	里仁2号墳出土罽付円筒埴輪実測図	66
挿図68	32号墳第1号埋葬施設第2号石棺人骨出土状況図	70

挿 表 目 次

挿表1—①	32号墳出土土器観察表	23
挿表1—②	32号墳出土土器観察表	24
挿表2	32号墳第1号埋葬施設第1号石棺出土堅柵一覧表	24
挿表3—①	33号墳出土土器観察表	43
挿表3—②	33号墳出土土器観察表	44
挿表4	33号墳出土鉄器・砥石観察表	45
挿表5	35号墳出土土器観察表	57
挿表6	35号墳主体部出土鉄器一覧表	57
挿表7	35号墳主体部石棺出土堅柵一覧表	58
挿表8	35号墳主体部石棺出土玉類一覧表	58

挿表9	集石遺構・遺構外出土土器觀察表	62
挿表10	鳥取県内堅櫛出土地名表	65
挿表11	里仁古墳群調査遺構一覧表(1984)	68
挿表12	里仁古墳群古墳一覧表	69

図版目次

図版1	里仁古墳群(調査区)全景航空写真
図版2	32号墳墳丘、第1号埋葬施設第1・第2号石棺蓋石検出状況
図版3	32号墳第1号埋葬施設第1・第2号石棺、第2号石棺人骨出土状況
図版4	32号墳第2号埋葬施設、第3号埋葬施設埴輪棺出土状況
図版5	32号墳第3号埋葬施設埴輪棺出土状況、同埴輪棺本体
図版6	32号墳墳頂部・掘り割り内遺物出土状況
図版7	33号墳墳丘、第1・第2号埋葬施設
図版8	33号墳第1号埋葬施設土層断面及び標石、同遺物出土状況
図版9	33号墳第1号埋葬施設遺物出土状況
図版10	33号墳第2号埋葬施設、同遺物出土状況
図版11	33号墳第3号埋葬施設、同完柩状況
図版12	33号墳第4号埋葬施設、第5号埋葬施設
図版13	33号墳掘り割り内土器・鉄斧出土状況、第1号木棺墓
図版14	34号墳墳丘、墳頂部埋葬施設
図版15	34号墳第1号埋葬施設、第2埋葬施設
図版16	34号墳第4号埋葬施設、第5号埋葬施設土層断面
図版17	35号墳墳丘、主体部石棺・掘り方
図版18	35号墳主体部石棺・蓋石、主体部石棺
図版19	35号墳主体部棺内遺物出土状況
図版20	第1・2・3号集石遺構
図版21	32号墳出土遺物①第1号埋葬施設第1号石棺出土堅櫛・第3号埋葬施設埴輪
図版22	32号墳出土遺物②埴輪1
図版23	32号墳出土遺物③埴輪2
図版24	33号墳第1号埋葬施設出土遺物鉄器
図版25	33号墳第1号埋葬施設出土遺物鉄器・磁石
図版26	33号墳出土鉄器
図版27	33号墳第3号埋葬施設埴輪
図版28	33号墳出土遺物埴輪・土師罎
図版29	35号墳主体部石棺出土遺物堅櫛他
図版30	35号墳主体部石棺出土遺物鉄器・玉類
図版31	第1号集石遺構出土土器、里仁古墳群出土埴輪調整手法

第1章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

発見の契機 今回調査を行なった里仁32～35号墳の4基の古墳は、1973年「鳥取県遺跡地図」の段階ではその存在を知られていなかった。里仁古墳群の立地する里仁宇岩ヶ谷には1972年高草清掃工場が塵介処理場として建設されており、ゴミ置き場とされた谷中央部は両側を削り取って埋め立てられている。削られた丘陵は切り立った崖面となっており、それが原因となって1983年大雨の後里仁32号墳の墳丘北半が自然崩落して崖面に2基の箱式石棺が露出、内1棺（第1号埋葬施設第2号石棺）には人骨が確認されるに至った。鳥取県埋蔵文化財センターと鳥取市教育委員会は現地を確認し、半壊した古墳（里仁32号墳）の後方尾根筋に新たに3基の古墳を発見した。露出した石棺は、鳥取県教育委員会文化課と鳥取市教育委員会が協議の上、応急の処置として、清掃工場を管理する東部広域行政管理組合によって埋め戻され、とりあえずの現状保存がはかられた。この時採集された円筒埴輪片が鳥取市文化財収蔵センターに保管されており、鳥取市教育委員会の御好意で、その一部を併せて報告することができた。

布勢総合運動公園整備計画 ところが里仁古墳群の一部を含む、布勢、里仁の一帯は布勢総合運動公園として整備が進められており、すでに、1980年布勢総合運動公園整備事業に伴い、鳥取県教育文化財団が布勢グラウンド第1遺跡、第2遺跡、布勢グラウンド古墳群（里仁古墳群の1部）^{註1}の調査を行っており、調査結果は「布勢遺跡発掘調査報告書」にまとめられている。当該地の遺跡、古墳は調査後すべて消滅している。

第2期計画 その後、里仁32～35号墳の立地する支丘陵が、先述した布勢総合運動公園整備の第2期計画に伴う造成地区に当たったため4基の古墳の消滅が避けられない状況となり、鳥取県都市計画課と文化課が協議の結果、都市計画課が鳥取県教育文化財団に調査委託して、記録保存をはかることとなった。ここで、改めて4基の古墳は里仁32～34号墳と命名され、鳥取県教育文化財団、東部埋蔵文化財調査事務所が発掘調査にあたった。

註1 『布勢遺跡発掘調査報告書』1981年。以下「布勢グラウンド第1・2遺跡」と呼称する。布勢グラウンド古墳群については第4章第3節挿表12を参照されたい。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査 発掘調査は1984年11月5日から開始され、降雪期を控えた関係で、12月一杯までを目安に進められ、12月23日に現地調査を終了した。現地説明会は12月16日に行なわれ、小雨模様にもかかわらず約70名の参加者があった。調査の経過については調査日誌（抄）を参照されたい。現地での発掘調査と併行して、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターにおいて整理が進められ、1985年3月20日すべての整理作業を終了した。

調査日誌（抄）

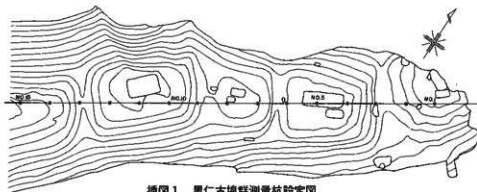
11月5日	調査開始。里仁32号墳から発掘を始める。	11月17日	笠形埴輪削り内において埴輪断片、土器出土。
11月6日	34号墳調査開始。	11月21日	33号墳頂部において2基の埋葬施設、河北側墳域において埴輪棺（第3号埋葬施設）検出。
11月10日	32号墳頂部において埴輪棺（第3号埋葬施設）出土。35号墳調査開始。	11月30日	32号墳第1号埋葬施設第2号石棺人骨を確認。同第1号石棺において埴輪出土。
11月11日	33号墳調査開始。	12月3日	奈良大学水野正野氏現地指導（～4日）
11月14日	34号墳埋蔵施設発掘。		

12月4日 33号墳第1号埋葬施設において鉄器、磁石が出土。32号墳墳丘コンター測量開始。
 12月5日 35号墳第1号埋葬施設蓋石除去。鉄器・整飾・管玉・小玉が出土。
 12月10日 泉石遺構調査開始。

12月12日 全景航空写真撮影（日本航空に依頼）。
 12月14日 34号墳第4・第5埋葬施設検出。文化庁黒崎直調査員来訪。
 12月15日 33号墳第4・第5埋葬施設検出。
 12月16日 現地説明会。

第3節 調査方法と体制

調査方法 調査対象地区となったのは里仁古墳群が立地する丘陵尾根部2,800㎡である。発掘調査は調査員の指導の下、補助員、作業員が協力して行なわれた。遺構及び遺物の出土状況の実測・測量においては、尾根線主軸に沿って基準線を通し、北東No1から南西No15までの基準杭を設定した（挿図1）。写真は黒白・カラー・カラーリバーサルの3種類を撮影している。



挿図1 里仁古墳群測量杭設定図

調査体制 里仁32～35号墳の発掘調査及び整理にかかわる調査体制は以下の通りである。

- 調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団
- 調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 東部埋蔵文化財調査事務所

所長	太田垣基一
調査員	中原 齊
同	山折 雅美
- 調査指導 鳥取県教育委員会文化課

文化財係長	亀井 照人
文化財主事	田中 弘道
同	近藤 滋

 鳥取県埋蔵文化財センター
- 調査協力 鳥取市教育委員会 東部広域行政管理組合

発掘参加者 下記の方々に発掘調査作業員として協力していただいた。記して謝意を表したい。
 有田安子、稲本房枝、今崎豊子、植田貞子、上田順子、植田力三、太田則謙、大西美智枝、大西美智子、岡野芳子、岡本安子、加藤千代恵、岸田倉之助、岸本君子、窪田茂一、窪田とう、小谷智江、小谷光子、小谷美津子、杉本朋子、竹中栄、竹中しづ枝、田中英智枝、田中芳一、田中義久、田辺千枝子、田脇さよ子、戸田富美枝、土橋郁、中谷沢子、西尾昌子、西村涉、橋本あき子、浜本美佐子、浜本好子、林意志子、福田いく子、福田清子、福田未子、福田善一、福田千代子、藤森光恵、前田房子、松本クニ子、水原美智子、宮脇春江、村田由美子、森岡清野、森岡寿雄、守部まつえ、森みどり、森本スミエ、森本造栄、森本美代子、米沢とし子（敬称略、51歳）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

里仁古墳群は鳥取市北西部里仁字岩ヶ谷、大橋字村土居に所在する。

鳥取県 鳥取県は北は日本海に面し、南はなだらかな中国山地をひかえた東西100kmに及ぶ細長い県であり、面積3,492.65km²、人口61.3万人を数える。県土の75%は山林であり、生活領域は海岸に開けた沖積平野と山間の谷奥平野に展開している。旧国名でいえば東が因幡国、西が伯耆国であるが、地形的には伯耆国は西と東に分けられ、因伯を合わせて東、中、西部の3地域に分けられる。それぞれの地域には大河流域に形成された沖積平野が開けており、因幡は千代川下流の鳥取市、東伯耆は天神川流域の倉吉市、西伯耆は日野川下流域の米子市を中心として発展している。米子市の北側弓ヶ浜半島先端部には日本海側唯一の漁港境港をもつ境港市があり、漁業を中心に発達している。鳥取県は、この4市を中心に6郡、35町村で構成される。

鳥取市 県東部に位置する鳥取市は鳥取県の県庁所在地であり、周辺は東に岩美郡福部村、国府町、南に八頭郡河原町、郡家町、西に気高郡気高町、鹿野町に囲まれている。面積237km²、人口13万人余の地方都市である。鳥取周辺の地形をみると東、西、南の三方を山に囲まれ、北方には鳥取砂丘、日本海が広がっている。平野の中央部を千代川が流れ、南から北へと平野を二分して貫流し、日本海へそそいでいる。また、平野の西端には県下最大の潟湖、湖山池がある。

千代川、鳥取平野 千代川は中国山地の奥深く八頭郡智頭町に源を発する総延長56.8kmの大河川で野坂川、袋川等大小の支流を合流し一大水系をなしている。鳥取平野はかつて洪積世～沖積世初期には鳥取湾（鳥取潟）と称される入海あるいは潟湖であって、縄文時代前期以後の海退による沼沢地化と、古墳時代以後に千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積により形成された沖積低地である。

湖山池とその周辺 里仁古墳群が位置するのは千代川左岸

の湖山池南東岸近くであり、湖岸からの距離は1.3kmとなる。

湖山池は周囲18km、面積7.25km²を測り、かつては入海だったものが砂州で湾口部が閉塞され潟湖化したものである。内湾の面影は旧海島である青島、天神山、山王山、足山などの岩島地形の波食窪に残されている。この地域の低地にはかつての沼沢地の拡大に伴い水性



挿図2 里仁古墳群の位置

植物が生育し、厚さ数メートルにも及ぶ「ガマクソ」と呼ばれる未分解植物遺体層（泥炭）の堆積が顕著にみとめられる。湖山池周辺の山地形は南西方に聳える高山などの1,000mクラスの山地から北方に段階的に高度を下げており、海拔400m以下の山地は起伏が小さく、湖山川、野坂川などの中小河川が山間をぬって放射状に分布している。里仁古墳群はこれらならかな山地形がいくつも枝分かれし、かつて入海中に岬状に突出したであろう風化花崗岩地帯の支根の1つに位置している。

参考文献 豊島吉則「鳥取の自然と人文・地形」『新修 鳥取市史』第一巻 1983

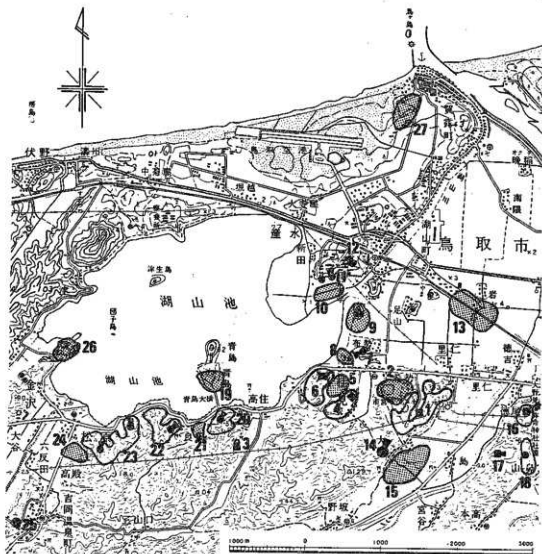
第2節 歴史的環境 一湖山池周辺一

湖山池 「湖山長者伝説」や冬の「石がま漁」で知られる湖山池はその周囲に原始、古代の遺跡の多いことでも有名である。とりわけ湖山池東、南岸は近年の開発事業などに伴い、貴重な遺跡の発見が相次いで大規模な発掘調査が行なわれており、鳥取市域でも遺跡の密集度の高い地域となっている。

縄文時代 この地域では低湿地の遺跡から縄文時代の遺物が数多く出土している。その時期は桂見遺跡（5）などでは、前期末まで溯れるようであるが遺跡が継続する現象はみられず、古くから著名な青島遺跡（19）を始め、桂見遺跡（5）、布勢グラウンド第1遺跡（2）では豊富な木製品や植物遺体と共に後期を主体とする土器群が検出されている。

弥生時代 弥生時代になると遺跡の数は増加し、肥沃な沖積低地を生産基盤とした初期農耕集落の広がりが見えるが、実際には縄文時代に続いて弥生時代の遺跡の多くが沖積平野内の地表下数mに存在しており、集落の実態は不明瞭なままである。前期の遺跡としては、青島遺跡（19）、東岸の湖山第2遺跡（10）さらに東側の千代川と湖山池の中間に位置する岩吉遺跡（13）がある。湖山第2遺跡では前期末頃の堅穴住居跡と推定される柱穴群が発見されている。中、後期になると前期の遺跡が継続して営まれ、集落規模も大きくなるようであるが、これら母村的集落から分付した小規模集落が各所に成立している。集落遺跡としては、湖山池南岸の松原谷田遺跡（24）、岩本遺跡（26）、東岸の布勢グラウンド第2遺跡（2）、天神山遺跡（9）、帆城遺跡（8）、北岸には湖山第2遺跡（10）が知られており、発掘調査により住居跡を始めとした遺構と、多くの遺物が発見されている。この中で湖山第2遺跡（10）と、布勢グラウンド遺跡（2）で皆玉木製品が検出され、玉作工房の存在が推定されるのは注目される。その他には、湖山池南東岸の高住において流水文をもつ扁平紐式銅鐸が出土している（3）。塞ノ谷遺跡（21）では火切臼、山下駄、梯子などの多量の木製品が出土しており、先述した青島遺跡（19）とともに通常の集落遺跡でなく、祭祀的な色あいの強い遺跡とされている。弥生時代の墳墓としては桂見の丘陵上に土壇墓群が散在するが、西桂見遺跡（6）では1辺64m、高さ5mの規模をみせる四隅突出型方形墓が後期末に出現しており、弥生時代の墳墓としては他を圧する存在である。

古墳時代 古墳時代になると湖山池周辺の丘陵上には隙間なく古墳が造られるようになる。前期古墳としては最近調査された桂見古墳群（4）があり、1辺28mの方墳である2号墳主体部の長大な箱式木棺からは舶載の内行花文鏡、斜縁獣帯鏡が出土して注目を浴びた。またこの時期の小



- | | | |
|-------------------------|----------------------|---------------------|
| 1. 屋仁古墳群(36基) | 10. 湖山第2遺跡(縄文~中世) | 19. 青島遺跡(祭祀・縄文~弥生) |
| 2. 布勢グラウンド第1・2遺跡(縄文~中世) | 11. 三浦1号墳(前方後円・36m) | 20. 高住古墳群(12基) |
| 3. 高住銅器出土地(流水文銅器) | 12. 大船段1号墳(前方後円・47m) | 21. 壺ノ谷遺跡(祭祀・弥生~古墳) |
| 4. 桂見古墳群(桂見2号墳・方28m) | 13. 岩古遺跡(縄文~小世) | 22. 良田古墳群(34基) |
| 5. 桂見遺跡(縄文) | 14. 精間1号墳(前方後円・90m) | 23. 松原古墳群(16基) |
| 6. 倉見塚遺跡(四隅突出型方形墓) | 15. 大橋遺跡(弥生~中世) | 24. 松原谷田遺跡(弥生~平安) |
| 7. 布勢1号墳(前方後円・60m) | 16. 徳尾古墳群(古墳中期~中世) | 25. 翠岡長者古墳(古岡1号墳) |
| 8. 帆城遺跡(縄文~小世) | 17. 古海36号墳(前方後方・60m) | 26. 岩本第1・第2遺跡 |
| 9. 天神山遺跡(縄文~中世) | 18. 古海古墳群(12基) | 27. 西露第1・第2遺跡 |

挿図3 鳥取市北西部遺跡分布図

規模墳墓群としては西桂見遺跡の中の倉見古墳群（6）が調査されており、古墳時代前期の墓制の様相が明らかになりつつある。中、後期の古墳の多くは、倉見古墳群にみられるような中、小古墳であると思われるが、北東～南東岸にかけては布勢1号墳（9）、大熊段1号墳（12）、三浦1号墳（11）などの前方後円墳が全長50～60mの規模をもち、南東～南岸の里仁古墳群（1）、高住古墳群（20）、良田古墳群（22）、松原古墳群（23）、の中にも前方後円墳がみられる。前方後円墳として最大のものは里仁古墳群のすぐ南西に位置する杣間1号墳（14）であり、全長90mの規模を誇る。また、湖山池からは少し離れるが杣間1号墳と野坂川の谷をへだてた古海の丘陵中には全長63mの前方後円墳である古海36号墳（17）があり、最近調査された徳尾古墳群（16）では中期の方墳が発掘され、里仁32～35号墳とほぼ同時期の古墳として注目される。後期の横穴式石室をもつ古墳として知られるのは高住12号墳（20）、葦岡長者古墳（吉岡1号墳）（25）、山ヶ鼻古墳（古海13号墳）（18）のみであり、葦岡長者古墳は6世紀後半の両袖式横穴式石室、山ヶ鼻古墳は剣り抜き石棺式石室をもっている。この時代の横穴墓の存在は里仁周辺で知られているが、未調査のためその様相は全く不明で、消滅したものも多い。古墳時代の集落の多くは、弥生時代から引き続き営まれたものと考えられ、前記の湖山第2遺跡（10）、布勢グラウンド第2遺跡（2）の他大杣遺跡（15）などでも多くの遺構が発見されている。祭祀遺跡としての青島遺跡（19）、塞ノ谷遺跡（21）も古墳時代まで継続するようである。

歴史時代 湖山池周辺は、律令体制下には高草郡に組み込まれ、湖山池南東岸の地域は東大寺領高庭荘として開発されたことが史料に残されている。この頃の高草郡の中心は高蒲庵寺、大野見宿禰神社のある古海郷周辺にあったと考えられ、高草郡衙の位置もこの周辺に求めることができよう。いずれにしても因幡国造浄成女に代表される古代因幡氏の本貫地は高草郡と考えられ、因幡国府のおかれた法美郡と共に古代因幡の中心地であったと思われる。

中世 その後、この地が歴史上に現われるのは15世紀になって因幡守護山名氏が布勢天神山城（9）を築城し、因幡支配の拠点としてからである。この時期の土壌墓、火葬墓が周辺丘陵から古墳の調査に伴って発見されており、考古学的知見が加えられている。いずれにしても、縄文時代～中世、現代に至るまで湖山池周辺は、因幡の中心として栄えたところであり、その背景には自然、文化、交通の母胎としての湖山池が今と変らぬ姿をみせていたことであろう。

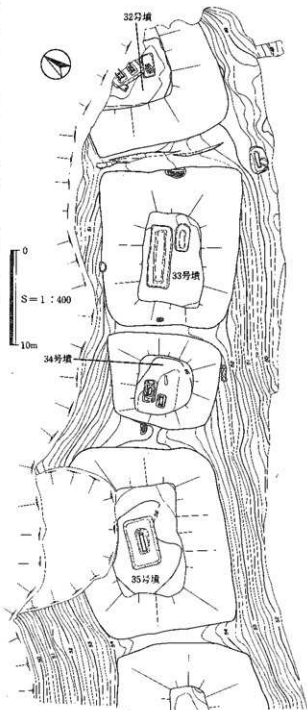


写真2 調査風景

第3章 調査の内容

第1節 調査の概要

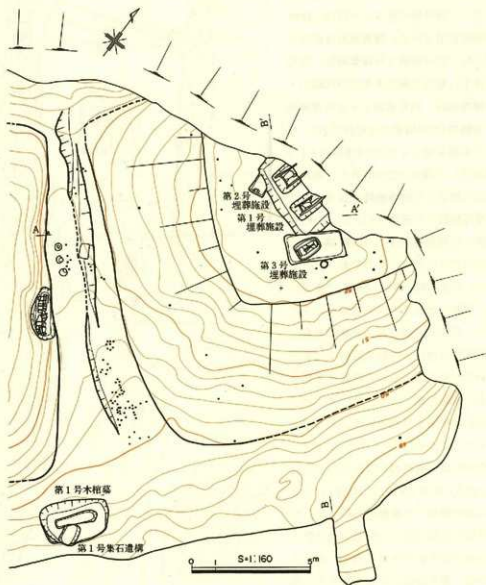
里仁古墳群は湖山池の東1.8kmにある北東へ延びる丘陵上に展開する古墳群である。今回調査対象となった4基の古墳は丘陵の最も高い所に位置する。1983年に新たに発見されたもので、北東側から32号、33号、34号、35号墳とした。全て方墳であり、34号墳を除くと一辺14~18mの中規模古墳である。埋葬施設は組合せ箱式石棺(32号墳第1号埋葬施設、35号墳主体部)、組合せ箱式木棺(33号墳第1・2号埋葬施設、34号墳第1・2号埋葬施設)、埴輪棺(32号墳第3号埋葬施設)、埴輪片で墓壇を覆うもの(33号墳第3・4号埋葬施設)、土槨基(32号墳第2号埋葬施設、33号墳第5号埋葬施設、34号墳第3~5号埋葬施設)が確認された。この内32号墳第1号埋葬施設は1つの墓壇の中に2基の石棺を併葬するものである。出土遺物としては埴輪、鉄器、埴輪、玉類等がある。埴輪は體付きの円筒埴輪の出土が目立ち、特に32号墳の第3号埋葬施設出土の埴輪棺は體付きの円筒埴輪の上に複合口縁の甕が結合するもので特異な形態を呈する。鉄器は剣、刀子、鏃、斧、鉞、鋸等が33号墳第1号埋葬施設、35号墳主体部を中心に出土しバラエティーに富む。この内33号墳の埴輪部で出土した2個の鉄斧は鋳造の鉄斧であり注目に値する。埴輪は32号墳第1号埋葬施設第2号石棺と33号墳主体部で出土し総数34個を数える。玉類は35号墳主体部で出土しガラス小玉48個、碧玉製管玉6本を数える。古墳以外に木棺墓1、中世墓と考えられる集石遺構を検出した。



挿図4 里仁32・33・34・35号墳位置図

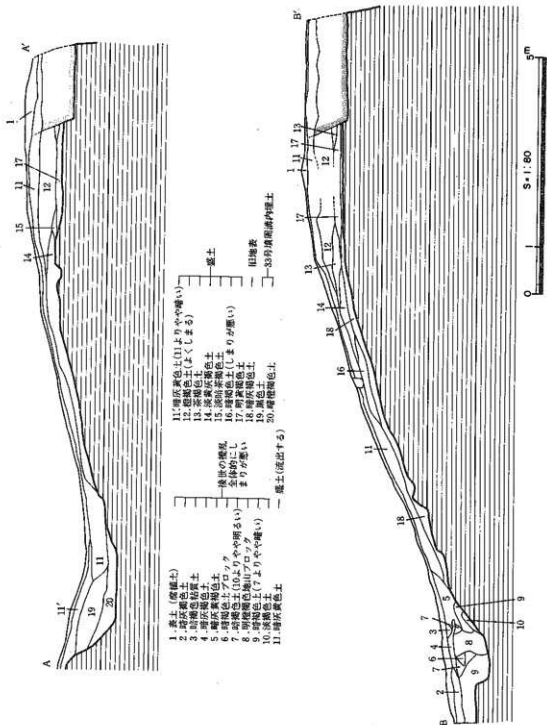
第2節 里仁32号墳 (挿図5～24、図版2～7、21～23)

里仁32号墳は南西から北東へのびる尾根が標高52m付近で北側へやや主軸をふる辺りに位置しており、今回調査した古墳の内最も尾根の先端に立地する。本古墳は調査開始時既に墳丘の北側が崩落しており、石棺が2基（第1号埋葬施設）崖面に露出していた。墳形は方形を呈する。墳丘は基本的には地山を整形した後に盛土を墳頂部及び墳丘側面に行うものである。尾根をその主軸に直交する方向で断ち割って溝を造り、その溝を北西、南東側で鉤状に曲げることによって墳形を造り出す。ただし南東側の斜面は地山を整形することなく、旧地形をほぼそのまま(挿図6、第18層上面) 利用して盛土をする。その為墳丘の南東側の墳裾線は明瞭ではない。盛土は墳丘の

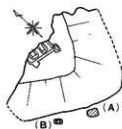


挿図5 32号墳墳丘実測図

北側ほど厚くなり、墳頂部において最大0.7mの厚さとなる。墳丘の規模は南西辺墳裾で約14m、南西掘り割り底から墳頂部まで1.8mの高さを測る。掘り割り幅は最大で2.1mを測る。掘り割りは33号墳のそれと切り合っており、土層断面（挿図6）より33号墳の周溝内埋土（第19層）を切



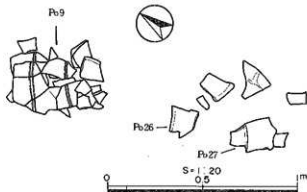
挿図 6 32号墳墳丘土層断面図



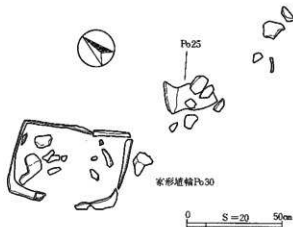
挿図7 32号墳丘横断面模式図

り込んで造られているものと思われる。埋葬施設は墳頂部のみで検出された。第1号埋葬施設(挿図10~13、図版2、3)は墳頂部平坦面の中央と思しき位置で検出された。崖面に2基の箱式石棺が露出していたことから、当初切り合う2つの墓塚を想定したのであるが、精査の結果2基の箱式石棺を納める1つの墓塚が検出された。この墓塚は主軸をN-17°-Eにとり、上縁東西辺で推定380cm、南北辺92cm残存する。深さは65cmを測る。墓塚の中に、墓塚と主軸をほぼ1にして、0.53mの距離をとって2基の箱式石棺が納められる。いずれも北側部が破損している。

西側の石棺を第1号石棺、東側のそれを第2号石棺とする。第1号石棺(挿図10~12、図版2、3)は墓塚をさらに東西92cm、南北90cm以上、深さ33cmの規模で掘り込み、組合せ箱式石棺を納めるものである。石英安山岩質板状安山岩の板状節理を利用して造った厚さ6cm程の板状の石を用いて小口石の外側に両側石を配し、床面には敷石を施す。規模は内法で長さ103cm(残存部)。南側幅55cm、北側幅50cm、高さ43cmである。棺の構築は墓塚の床面の南端に掘り込みを設け、小口石(高さ62cm、幅55cm)を埋め立てる。北側の小口石も同様に埋め立てられたのであろう。その際に楔状の石を小口石の背後に込め安定度を確保する。両側石も小口と同様に掘り込みを設けて埋め立てる。楔石は東側石の内面に1枚のみ見られる。その後敷石を施す。調査時において敷石が重なり合うのであるが、これは北側部の崩壊等によって後世に生じた石棺の歪によって生じたものであり、本来は整然と敷かれていたものと思われる。棺本体が組み立てられた後、側石及び小口石の上面まで覆う様にして粘土を巻く。これによって蓋石と壁石との密閉度が増すと共に壁石の安定度が増す。次に暗褐色土(挿図10第8層)を間層にして蓋石をのせる。蓋石は長さ120cm、幅98cmのものが1枚残るのみである。蓋石は1部に粘土が付くのみで、粘土で全体を覆う状況は呈していない。第2号石棺(挿図10、13、14、図版2、3)は東西辺70cm、南北辺108cm以上、深さ32cmの規模の掘り方内に納められ、内法が長さ108cm(残存部)、南側幅35.5cm、北側幅37cm、



挿図8 32号墳掘り割り内円筒輪軸等出土状況図(A)



挿図9 32号墳掘り割り内家形輪軸等出土状況図(B)

1. 緑茶褐色土
2. 褐色土を含む緑茶褐色土
3. 暗褐色土
- 3' 5よりやや暗い
4. 暗茶褐色土
5. 暗茶褐色土(粘土ブロックを含む)
6. 深褐色褐色土
7. 深褐色褐色土
8. 暗褐色土
9. 黄褐色土
10. 暗褐色土
11. 北面小口部腐蝕時に入れられたと思われる土
12. 木の櫛の残片
13. 暗褐色土(横置の籠り込み)
スクリーントーン 粘土

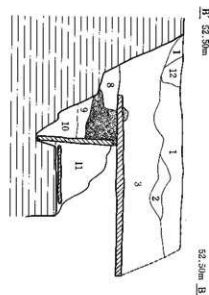
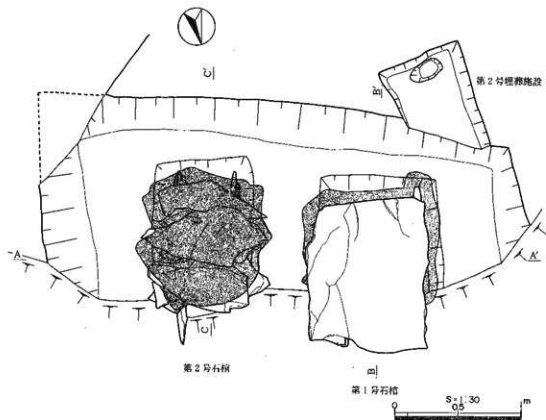
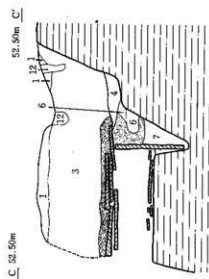
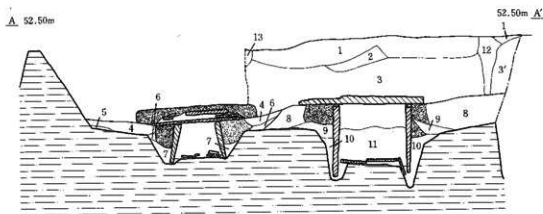


插图10 32号墳第1号埋葬施設(第1号、第2号石棺)墓石検出状況及び土層断面図

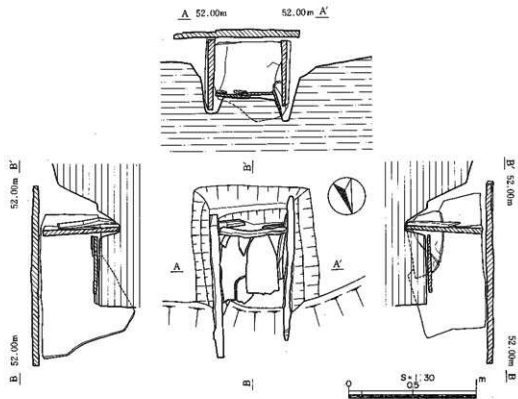


插图11 32号墳第1号埋葬施設第1号石棺実測図

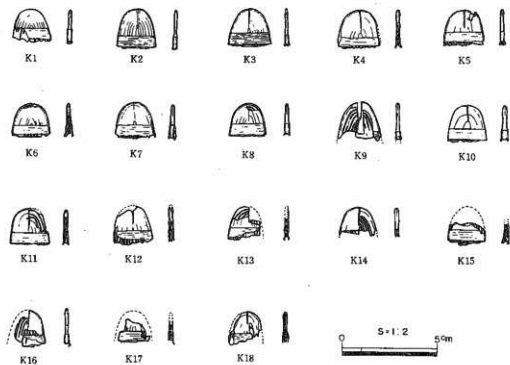
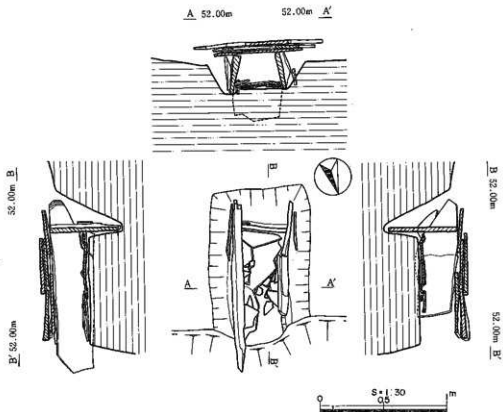


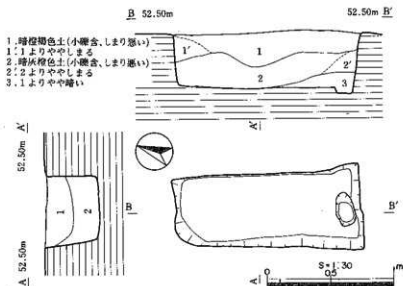
插图12 32号墳第1号埋葬施設第1号石棺出土壱部実測図



挿図13 32号墳第1号埋葬施設第2号石棺実測図

高さ29cmの規模をもつもので、第1号石棺より小型のものである。両側石はひどく傾いていた。棺材、構造、構築法は第1号石棺と同様のものである。但し蓋石に幅80cm~100cm、長さ40cm程度の石を数枚重ね合わせる点、その上に目張りの為の粘土が被覆されている点で第1号石棺と異なる。両石棺の蓋石、小口石、

側石の内面は赤色顔料が残っていた。土層断面（挿図10）より第2号石棺は、第1号石棺の構築後第1号石棺を埋めた土をその蓋石が露呈するまで取り除き、その後第8層を掘り込んで構築されている。第1号石棺の蓋石の上に粘土が覆されていないのは、その際に蓋石を覆する粘土を除去し去ったからであろうか。第2号石棺構築後第1号石棺と



挿図14 32号墳第2号埋葬施設実測図

- | | | |
|-----------------|-----------|--------|
| 1. 淡褐色土 | 7. 黒褐色土 | — 機丸 |
| 2. 暗褐色土 | 8. 暗灰色土 | |
| 3. 上ごころ土 | 9. 暗褐色土 | — 墳丘底土 |
| 4. 赤褐色土 | 10. 茶褐色土 | |
| 5. 暗褐色土 | 11. 明黄褐色土 | |
| 6. 明茶褐色土(粘性がある) | | |

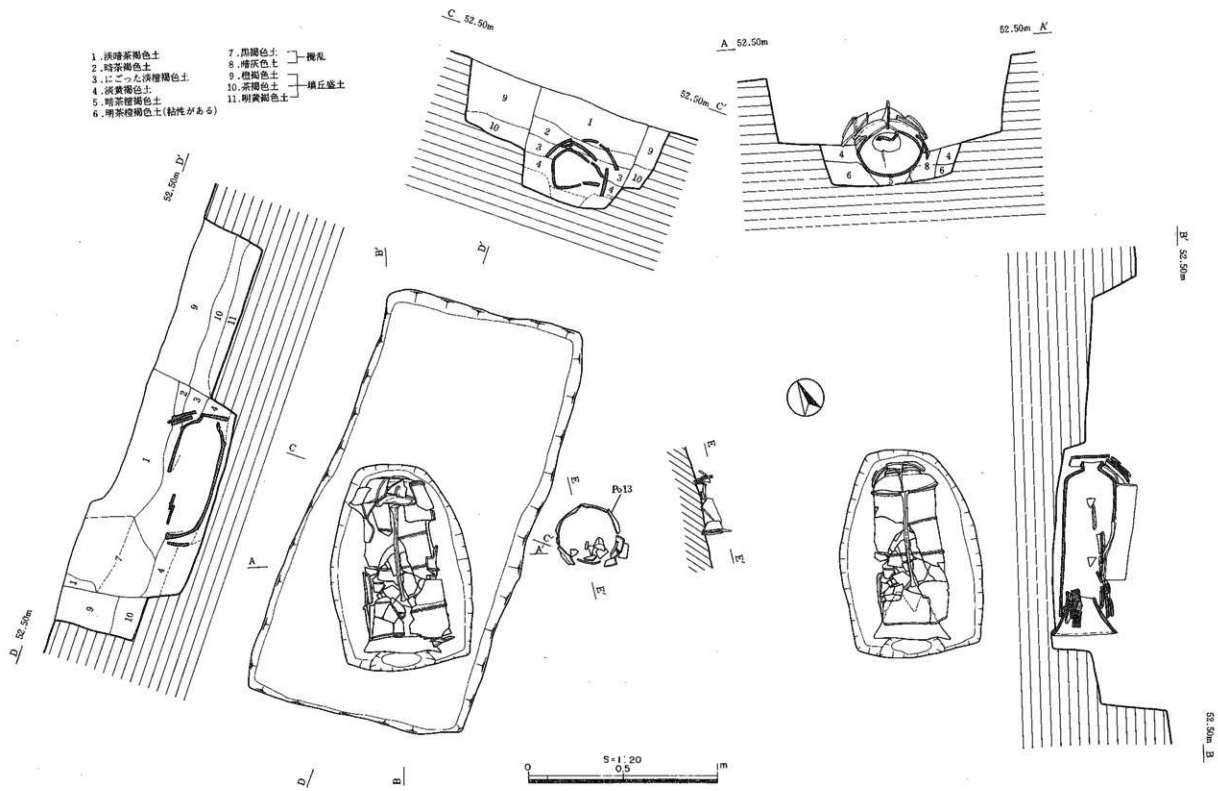
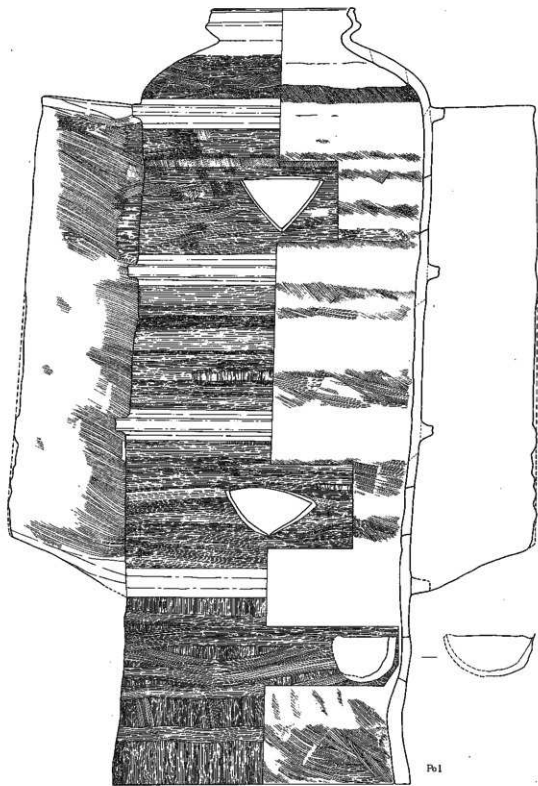


插图15 32号墳第3号埋葬施設実測図

第2号石棺は共に第3層、第1層の土で埋められている。この内第3層には第1号石棺構築時に立てられたと思われる埴輪片が混入していた。以上のことから第1号埋葬施設は大型の墓塚が第1号石棺構築時に第2号石棺の構築を想定して掘り込まれており、2基の石棺を併葬する計画が古墳築造時にあったことを窺わせるものである。第1号石棺内からは竪櫛(挿図12、図版21)が出土した。石棺北側部崩壊後に棺内に流入したと思われる土をふるい中に採集したもので、18個体が確認された。調査時の状況によれば、南側小口の東隅辺りに集中してあったものと思われる。第2号石棺内からは壮年～熟年の男性の可能性が高い人骨が出土した。遺存状態は大変悪く、元位置を移動しているものと思われる。第2号埋葬施設(挿図14、図版4)は第1号埋葬施設の掘り方を切って造られた土壌墓である。平面形は長方形で、主軸をN-1.5°Eにとる。上縁部で長軸148cm、短軸58cmの規模をもつ。床面南側部に27cm×15cmで深さ5cmの不整形な穴が掘られているが、用途等は不明である。遺物は全く出土しなかった。第3号埋葬施設(挿図15～18、図版4・5・22)は第1号埋葬施設のすぐ南東で検出された。当初尾根の稜線にほぼ平行する主軸をもつ長方形の墓塚を想定して掘り下げたのであるが、埴輪棺が想定した墓塚より約22°主軸を東に振るかたちで出土したため、土層断面(挿図15)を検討したところ、本来の墓塚は主軸(N-25°E)を棺と一にする長軸120cm、短軸78cm、深さ60cmの規模をもつ、釣り鐘状の平面形を呈する墓塚であることが推定されるに至った。この墓塚に棺の本体(Po1)を、口縁部を北側に向け、基底部に朝顔形埴輪の口縁(Po6)を挿入して納める。本体胴部は土圧によって陥没し内部に土が充満していた。棺本体として用いられた埴輪は、鱗付円筒埴輪の上に複合口縁の壺形土器が結合した形態をとる特殊なものである(床面側の鱗は欠かされている)。棺本体を墓塚に納めた後、基底部に挿入されたPo6の中に自然石2個、埴輪(Po2)片を入れ、棺本体の両脇及び基底部上面に透し孔を塞ぐ様に縦割りにした埴輪(Po2～4、Po8)片を覆い被せ、棺本体の口縁部も同様に埴輪(Po2、Po3、Po5、Po7)片で閉塞し、棺本体内部への土の流入を防ぐ。この埋葬施設に使用した埴輪は都合7個体である。鱗付のものが2個体、朝顔形埴輪が口縁部だけながら3個体、普通の円筒埴輪は2個体止まる。棺本体を除いて全て基底部が欠落しており、それらは本来立っていたものを再利用したものと思われる。棺本体内からは副葬品等の遺物は全く出土しなかったが、墓塚のすぐ南東に基底部Po13(挿図20、図版22)が立って出土した(挿図15、図版4)。出土遺物の内第1号石棺出土の竪櫛は全て彎曲結歯式で長さ2cm程度の小型のものである。歯部は欠失する。埴輪は第3号埋葬施設以外に墳丘上、掘り割り内で出土した。円筒埴輪Po10、Po12～14、壺形埴輪Po23が墳頂部で出土した。調査時の出土ではないが、鳥取市教育委員会が表採されたPo15、Po16も付け加える。掘り割り内では円筒埴輪Po9、Po11、朝顔形埴輪Po17～20、壺形埴輪Po21～29、家形埴輪Po30が出土した。Po30は著しい風化を受けながらも下部のみが原形を止めて出土した。その四辺の内に若干の破片が落ち込んでいたが、上部の復原は不可能であった。32号墳は古墳時代中期の築造と思われる。

註1 葬石名については鳥取大学赤木三郎教授に御教示を戴いた。



挿図16 32号墳第3号埋葬施設鐵付壺円筒埴輪実測図

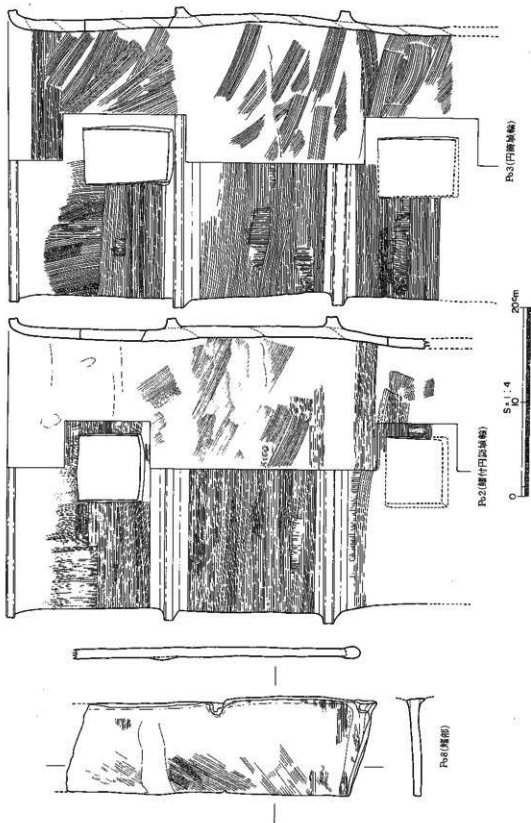
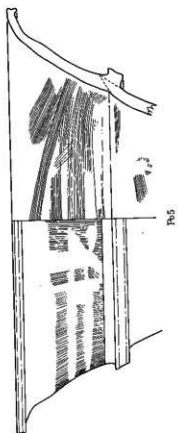


插图17 32号墳第3号埴輪施設出土櫛付円蓋埴輪・円蓋埴輪配置図



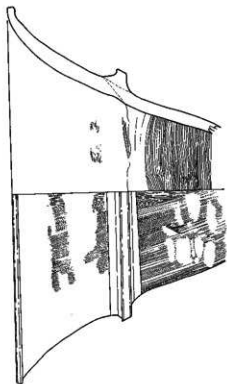
Pb5



Pb4



Pb7



Pb6



插图18 32号墓第3号埋葬施設出土棺盖剖面图

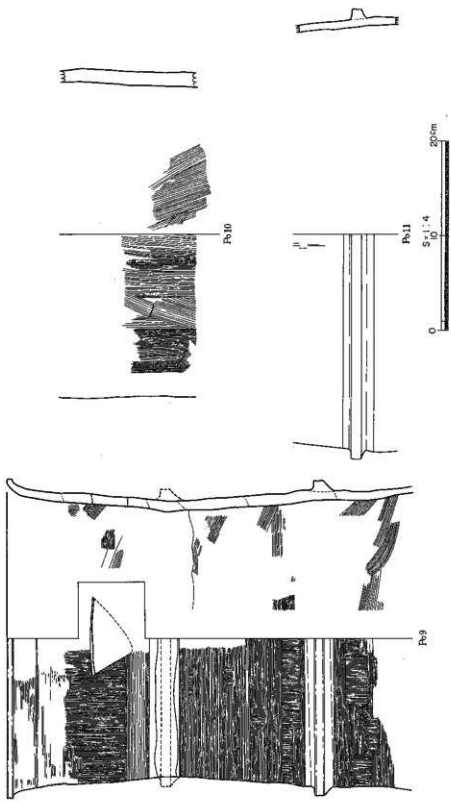
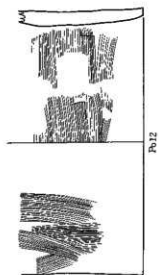


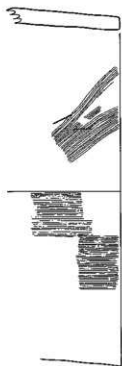
插图19 32号出土土輪実測図①(円筒土輪)



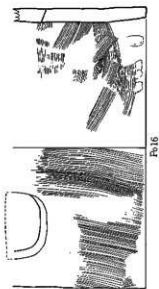
No. 15



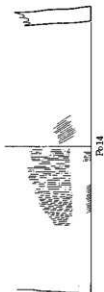
No. 12



No. 13



No. 16



No. 14



插图20 32号出土陶器支脚图②(巴西博物馆)

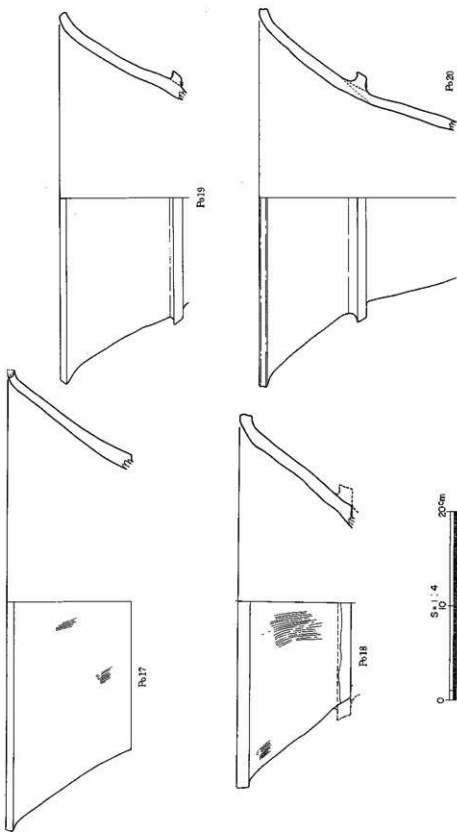


插图21 32号出土青铜器③(铜器形线图)

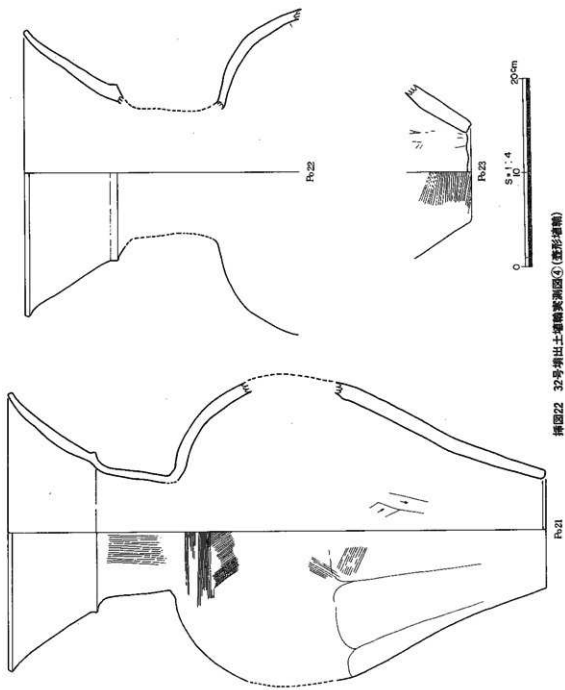


插图22 32号出土青铜器(4) (器形图)

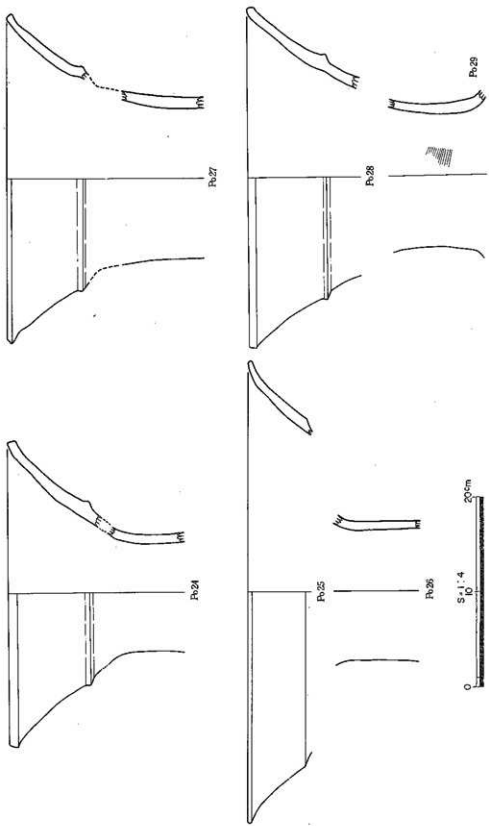


插图23 32号出土青铜测器⑤(壶形罐) (壶形罐)

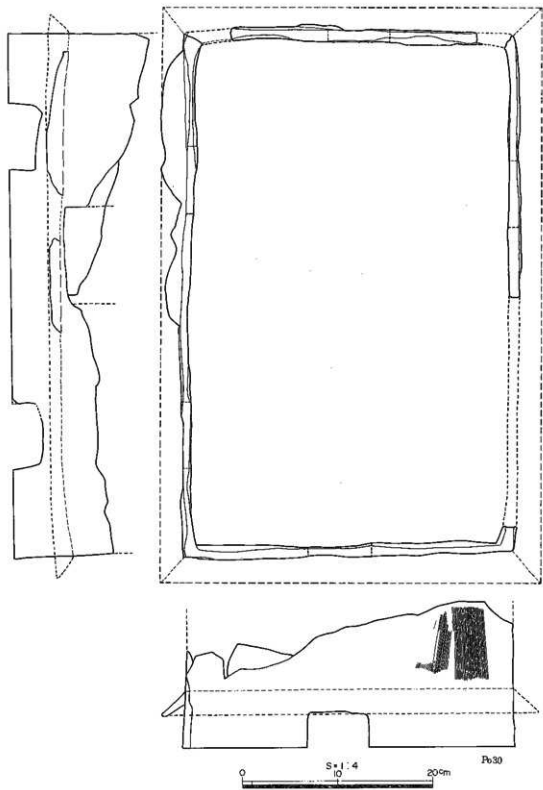


插图24 32号墳掘り割り内出土家形埴輪実測図

遺物整理 種別 調査番号	出土遺構	種類	①11 遺 構 の 位置 と 形状 の 説明	形 態	手 法	土 質	状況	色調	備 考
Po1 16 21	32号墳墓 3号埴輪 施設	埴輪付内 輪軸	①14.8 ①21.8 ①01.2 ①30.0 ①01.6 ①01.2	第1段より高く第1段から直立する 断面になる。第4凸部の上に乗る 真部よりヒが融合する。直は第3段 が厚く膨らみその上に内側して短 く立ちあがる複合形状となる。口 縁部に手摺面をもつ。凸部4を、 第2、4段の対向する位置に第2 角形断面をもつ。第1段をそれより多 しすれすれ下方に逐次進ませ1孔穿つ	外面 タテハク後ヨコナデ。凸部 ハワツケコナデ。右側は第3段ヨコハ ク。11縁部内外側ヨコナデによる。 他ハワツケ部は二条の沈線が走る。 他ハワツケ後ヨコナデ・ナメハク。 内面はヨコナデ・ナメハクの後、4cm おきにナデ消し。	褐色、 砂粒を 含む。	良好	淡黄赤 褐色	外周に黒 線有り。
Po2 17 21	32号墳墓 3号埴輪 施設	埴輪付内 輪軸	①11.9 ①25.6 ①02.0 ①01.2	第2段より高く第1段より多し るが第3段以上は口縁部に向つて 直する。11縁部は凸部状を呈す る。凸部はよく突出し断面が扁 平。第2段・第4段に長方形の透し 孔が、両方向に、それぞれ対向す る位置に2個ずつ穿れる。	外面 タテハク後ヨコナデ。内面 の上下・口縁部はヨコナデによりハ クが走る。内面 ヨコナデ・ナ メハクが走る。縁部断面には刀子状工 具による磨り付け跡・タテハク・ ヨコハクがみられる。内面・ナメハ ク・ヨコハク・ナデがみられる。特 に口縁部は強くヨコナデされる。	褐色、 砂粒を 含む。	良好	淡黄赤 褐色	外周に黒 線有り。
Po3 17 21	32号墳墓 3号埴輪 施設	内輪軸	①30.8 ①46.4 ①01.9 ①01.0 ①01.2	直立する断面がそのまま11縁部ま で通ずる。11縁部は凸部状を呈す る。凸部はよく突出し断面が扁 平。第2段・第4段に長方形の透し 孔が何方向に、それぞれ対向す る位置に2個ずつ穿れる。	外面 タテハク後ヨコナデ。凸部 の上下・口縁部はヨコナデによりハ クが走る。内面 ヨコナデ・ナ メハク及びナデがみられる。特に11 縁部は強くヨコナデされる。	褐色、 砂粒を 含む。	良好	淡黄赤 褐色	外周に黒 線有り。
Po4 18 22	32号墳墓 3号埴輪 施設	内輪軸	①28.6 ①9.5 ①01.1	直立する口縁部。11縁部は 凸部状を呈する。	外面 タテハク。断面付近はヨコ ナデ。内面 タテハクの後ナデ。断面 付近はヨコナデ。	褐色、 砂粒を 含む。	良好	淡黄赤 褐色	外周に黒 線有り。
Po5 18 22	32号墳墓 3号埴輪 施設	断面形埴 輪	①45.6 ①01.2 ①01.2 ①01.6	断面の一部と口縁部。口縁部は 平突部をもつ。一面の新面「M」、 断面がわかる。	外面 タテハク後ヨコナデ。口縁部 は平突部・凸部の上下は強くナデす る。内面 ヨコハク後ヨコナデ。11縁 部は強くナデす。	褐色、 砂粒を 含む。	良好	淡黄赤 褐色	外周に黒 線有り。
Po6 18 21	32号墳墓 3号埴輪 施設	断面形埴 輪	①39.7 ①22.2 ①01.4 ①01.8	断面の口縁部。11縁部は平突部 をもつ。一面の新面「M」が凸部 がわかる。	外面 一面はタテハク口縁部はタ テハク後ヨコナデ。口縁部は平突 部の上下は強くナデす。内面 一面は ヨコハク。口縁部はヨコナデ後ヨ コナデ。特に口縁部付近は強くナデ す。	褐色、 砂粒を 含む。	良好	淡黄赤 褐色	外周に黒 線有り。
Po7 18 22	32号墳墓 3号埴輪 施設	断面形埴 輪	①27.9 ①10.5 ①01.0	断面の一部と口縁部。口縁部は 凸部状を呈する。取壊しているが、一 面の断面を写したものと推される。	外面 一面はタメハク後凸部付近を ヨコナデ。口縁部はタテハク後ヨ コナデ。凸部付近は強くヨコナデす。 ナメハク・ヨコハク後ナデ。頂 に土士の隆起がみられる。下縁部 及び本体との接合部には路上を陥り付 ける。接合部に付けられた粘土には 磨の跡に想われたヨコハクがみら れる。接合部は平らな面を呈し製作製 作において刀子状工具の使用をうか がわかる。両面にはタテハク・ヨ コハクがみられるがこれは接合部に 本体のハクが移ったものと思われる。	褐色、 砂粒を 含む。	良好	淡黄赤 褐色	外周に黒 線有り。
Po8 17 22	32号墳墓 3号埴輪 施設	断面	①22.5 ①10.5 ①01.0	断面。	外面 ヨコハク・ヨコハク後ナデ。頂 に土士の隆起がみられる。下縁部 及び本体との接合部には路上を陥り付 ける。接合部に付けられた粘土には 磨の跡に想われたヨコハクがみら れる。接合部は平らな面を呈し製作製 作において刀子状工具の使用をうか がわかる。両面にはタテハク・ヨ コハクがみられるがこれは接合部に 本体のハクが移ったものと思われる。	褐色、 砂粒を 含む。	良好	淡黄赤 褐色	外周に黒 線有り。
Po9 19 22	32号墳墓 3号埴輪 施設	埴輪付内 輪軸	①33.8 ①42.8 ①02.1 ①01.3 ①01.4	頂に向つて磨き気味な面に第3段 の断面の上から口縁部断面に向 つて外傾する。口縁部には凸部 状を呈する。凸部はよく突出し断 面が扁平。第4段の対向する位置 に第2角形の透し孔が2個穿れる。 断面は凸部状を呈する。	外面 タテハク後ヨコナデ。口縁部、 凸部の上下はヨコナデによりハク が走る。内面 ヨコハク・ナメハ ク及びナデがみられる。	やや粗 砂粒を 多く含 む。	やや不 良	淡黄赤 褐色	外周に黒 線有り。
Po10 19 /	32号墳墓 丘上	内輪軸	①34.4 ①11.5	直立する断面。	外面 タテハク。内面 ナメハク。	やや粗 砂粒を 多く含 む。	良好	暗黄褐 色。	
Po11 19 /	32号墳墓 9号内内	内輪軸	①0.8 ①01.1	直立する断面。断面が他のもの に比べて薄く、凸部も突出度が小 さく、断面が扁平を呈する。	内外面とも其断が強く不明。	粗。砂 粒を 含む。	不良	淡明赤 点褐色	
Po12 20 22	32号墳墓 丘上	内輪軸	①13.1 ①28.3 ①01.5	第1段。わずかに覆りがあり。脚 地間の壁壁が残り。	外面 タテハク後最大下部をナデす。	やや粗 砂粒を 含む。	良好	外周は 磨り消 色。内 面は黒 色。	
Po13 20 22	32号墳墓 丘上	内輪軸	①12.6 ①36.9 ①01.6	第1段下部。	外面 タテハク。内面 ナメハク。 最大下部をナデす部分もある。	やや粗 砂粒を 含む。	良好	明黄赤 褐色	外周に黒 線有り。
Po14 20 /	32号墳墓 丘上	内輪軸	①8.9 ①30.2 ①01.5	第1段最下部。やや横ひらがり。	外面 タテハク。内面 タテハク後 ナデす。	やや粗 砂粒を 多く含 む。	良好	暗黄褐 色。	
Po15 20 22	32号墳	内輪軸	①11.6 ①32.8 ①01.3	第1段下部。直立する。	外面 タテハク後最大下部をナデす。 内面 タテハク後ナデす。	やや粗 砂粒を 含む。	良好	黄赤茶 褐色	外周に黒 線有り。 土佐市教育 委員会表 紙。
Po16 20 22	32号墳	内輪軸	①4.1 ①39.0 ①01.4	第1段。直立する。磨き面より10. 6cm上に平断面の透し孔が穿れる。	外面 タテハク。内面 ヨコハク。 ナメハクが最大断面にハクの後 に行なわれた磨り消しがみられる。	やや粗 砂粒を 含む。	良好	外周は 磨り消 褐色。内 面は淡 黄赤褐色。	外周に黒 線有り。 土佐市教育 委員会表 紙。

挿表1—① 32号墳出土土器観察表

遺物の 品目 図説番号	出土遺構	遺 種	尺 寸 図 説 番 号	形 態	手 法	胎 土	焼 成	色 調	備 考
P017 21 23	32号墳 9割り内	割断形埴 輪	①48.4× ②13.3× ③1.5	口縁部、外方へ開く。底部は強化 する。内面は脱脂している。	外面・割断が強いがたがたが 残る。アテ・コナテ と思われる。内面・割断のため不明。	やや粗 大粒を 多く含む。	下灰	透明黄 褐色	
P018 22	32号墳 9割り内	割断形埴 輪	①39.4× ②12.3× ③1.2	口縁部、腹部はやや厚し。平直 面をもつ。底部は外方へ開くと思 われる。	外面・割断が強いがタテハナが 残る。口縁部は強くコナテする。 内面・コナテ。	粗。大 きな粒 を含む。	不灰	外面は 褐色。内 面は 紫褐色。	外面に黒 底有り。
P019 22	32号墳 9割り内	割断形埴 輪	①38.3× ②13.5× ③1.1	口縁部、腹部は平直面をもつ。一 部の心室を下。内面は断面内 部を呈する。	外面・コナテ。内面・割断が著 しく認め不明。	良。砂 粒を含む。	良好	透明茶 褐色	
P020 21 22	32号墳 9割り内	割断形埴 輪	①29.8× ②9.9× ③0.9	腹部より縁部。口縁部は平直 面をもつ。一部心室を呈する。 心室は、断面形状を呈する。	内面・コナテ。内面・コナテ。	良。大 きな粒 を含む。	良好	紫黄 褐色	外面に黒 底有り。
P021 22 23	32号墳 9割り内	空形埴 輪	①29.1× ②9.6× ③1.3	腹部・肩部・腰部・口縁部が既 述は欠損しているため実測で は推定値や算入した。腹部が ゆるやかに外方へ開く。底部 に斜面上り。肩部は口縁より上 り外方をもつ。縁部は断面 形状で口縁部によって心室を呈 する。口縁部は外方へ開く。下 部に壁をもつ。口縁部は平直面 をもつ。	外面・底面と側面はハレ目の模状工 具による彫刻がみられる。肩部に コナテ・コナテハナ・底面にコナ テを残す。口縁部は断面のた り縁不明。内面・底面と上 り外方へ開く。下部はハレ 目がある。肩部・口縁部は断面のた り縁不明である。	やや粗 大粒を 含む。	やや不 良	口縁部は 褐色。内 面は外 部を呈す 茶褐色。肩 部は外 部を呈す 茶褐色。内 面は茶 褐色。	肩部外面 に黒底有 り。
P022 22 23	32号墳 9割り内	空形埴 輪	①30.0× ②1.3	1部より断面形状。口縁部は外方 へ開く。下部に壁をもつ。腹部は 平直面をもつ。	外面・割断のため不明。内面割断の ため不明。	良。大 きな粒 を含む。	良好	透明茶 褐色	
P023 22 23	32号墳 9割り内	割断形埴 輪	①27.0× ②9.6× ③1.4	腹部。	外面・コナテ。内面・胎土を 含むに生じたと思われるものがみ られる。	良。大 きな粒 を含む。	良好	外面は 淡黄色。内 面は褐色。 褐色。	
P024 22 23	32号墳 9割り内	空形埴 輪	①31.9× ②16.6× ③1.5	肩部と口縁部。口縁部は外方へ開 く。下部は壁をもつ。腹部は平直面 をもつ。	内面ともコナテ。	良。大 きな粒 を含む。	良好	透明黄 褐色	
P025 22 23	32号墳 9割り内	割断形埴 輪	①48.6× ②17.0× ③1.1	口縁部。広く外方へ開く。下部に 壁をもつ。腹部は丸くがよる。	内面ともコナテ。	やや粗。 砂粒を 多く含む。	良好	透明黄 褐色	
P026 22 23	32号墳 9割り内	空形埴 輪	②9.9	肩部。	内外面ともコナテ。	良。砂 粒を含む。	良好	透明茶 褐色	
P027 22 23	32号墳 9割り内	空形埴 輪	①33.6× ②1.3	肩部と口縁部。わずかに外方開 きの傾斜。口縁部は外方へ開く。 下部に壁をもつ。口縁部は平直面 をもつ。	内外面ともコナテ。	精良。 砂粒を 含む。	良好	透明黄 褐色	
P028 22 23	32号墳 9割り内	割断形埴 輪	①35.6× ②11.8× ③1.3	口縁部。外方へ開く。下部に壁を有 する。腹部は平直面を持つ。	内外面ともコナテ。	精良。 砂粒を 含む。	良好	透明黄 褐色	
P029 22 23	32号墳 9割り内	空形埴 輪	②1.3	肩部。	内面・コナテが既述。	精良。 砂粒を 含む。	良好	透明茶 褐色	
P030 24 22	32号墳 9割り内	空形埴 輪	①55.4× ②19.3× ③2.0	上部を欠損する。肩部の長方形の 底面が台形断面。下部は1部 の心室が1部残る。肩部は1部 残る。心室はスライド式の 心室が、基部面から4cmの辺りを 内面にかけていると思われる。 心室は断面の一部分に認められる。 断面形状は不明である。	外面・割断が強いが、一部にタ テハナが残る。内面・割断が強いが、 一部にタテハナが残る。	やや粗。 砂粒を 含む。	褐色灰 褐色		

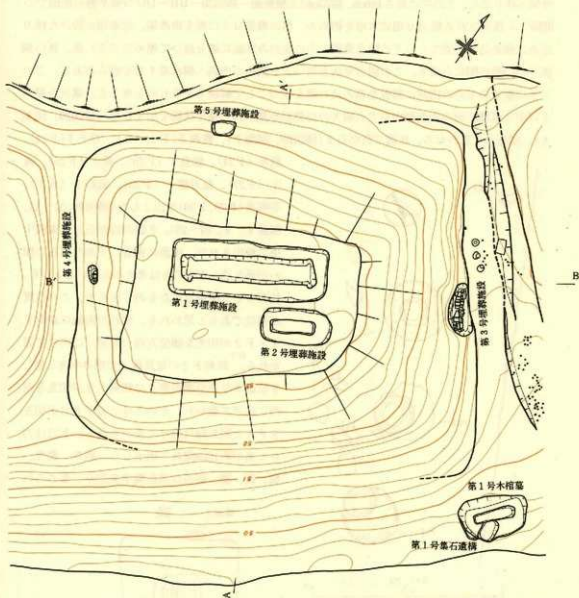
挿表1-② 32号墳出土土器観察表

遺物 番号	胎土部 長さ	幅	厚さ	備 考	遺物 番号	胎土部 長さ	幅	厚さ	備 考
1	1.7	2.0	0.1 0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆が一部剝離。遺存状態やや良。	10	1.9	2.0	0.2 0.3	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆の剝離が目立つ。遺存状態 やや不良。
2	2.05	2.1	0.1 0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆はやや薄い。遺存状態良好。	11	1.9	2.1	0.2 0.25	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 平直な傾斜が剥離。遺存状態 やや不良。
3	2.0	2.25	0.1 0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆はやや薄い。遺存状態良好。	12	※1.8	※2.0	※0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆の剝離が目立つ。遺存状態 やや不良。
4	2.0	2.2	0.1 0.15	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆が一部剝離。遺存状態やや良。	13	※1.6	※1.6	※0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆が大きく剝離。遺存状態不良。
5	1.8	2.1	0.2 0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆が一部剝離。遺存状態やや良。	14	※1.4	※1.8	0.1 0.15	彎曲結筒式。結筒部上部のみ 残存。漆が半面剥離。遺存 状態不良。
6	1.8	2.0	0.15 0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆はやや薄い。一部剝離。遺存状態 やや不良。	15	※1.1	1.9	2.0	彎曲結筒式。結筒部下部のみ 残存。遺存状態不良。
7	1.85	2.1	0.15 0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆が一部剝離。遺存状態やや良。	16	1.9	※1.5	0.1 0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ 2残存。遺存状態不良。
8	1.7	2.0	0.1 0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆の剝離が目立つ。遺存状態不良。	17	※1.2	※1.4	0.2	彎曲結筒式。結筒部分のみ 残存。遺存状態不良。
9	※1.8	※2.1	0.15 0.3	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 漆の剝離が大きく剝離。遺存状態 不良。	18	※1.5	※1.3	0.2 0.2	彎曲結筒式。結筒部のみ残存。 3残存。遺存状態不良。

挿表2 32号墳第1号埋葬施設第1号石棺出土土器一覽表 (※印 残存値)

第3節 里仁33号墳 (挿図25~45、図版7~13、24~28)

里仁33号墳は北東へのびる尾根上に位置し、北東側を32号墳、南西側を34号墳と接する。墳頂部の標高は53mである。墳丘は、尾根の主軸線に直交する掘り割りを穿つことにより南西辺、北東辺を形成した後、地山を整形し盛土を施して墳形を整えるものである。盛土は墳頂部で最大0.72mの厚さとなる。墳丘の南東側と北西側は墳丘面がそのまま急な斜面となって降ってゆく為明瞭な墳裾線を形成しない。墳形は北西側を底辺とした梯形を呈する方墳で、狭い尾根を一杯に利用している。主軸はN-59°-Eをとる。墳丘の規模は南西側辺で12m、北東側辺で14m北東側掘り割り底面から墳頂部まで3.2mの高さを測る。墳頂部は長さ9.5m、最大幅6.4mを測る梯形(墳

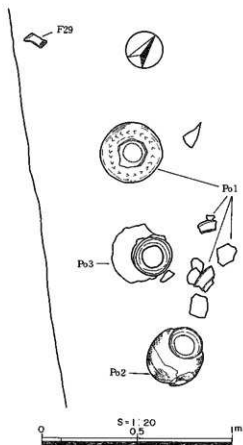


挿図25 33号墳墳丘実測図

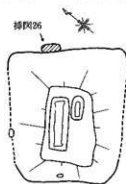
丘とは逆方向に広がる)の平坦面をもつ。掘り割りには北東側で顕著であるが、南西側で浅いものとなっており、北東側で幅1.4m、深さ1.0m、南西側で幅0.8m、深さ0.4mを測る。この内北東側の掘り割りは32号墳のそれと切り合う。土層断面(挿図28)より33号墳の掘り割り内埋土は32号墳築造時に掘り込まれている。埋葬施設は墳頂部で墳丘主軸線を挟んで2基、南東側以外の3辺の墳裾辺りでそれぞれ1基づつ、都合5基検出された。

第1号埋葬施設(挿図29~33、図版8、9、24~26)は墳頂部の北西側で検出された。主軸はN-58°-Eをとり墳丘のそれとほぼ同じくする。上縁部で長さ623cm、幅215cm、深さ27cm(残存)の細長い墓壇をさらに長さ540cm、幅109cm、深さ60cm前後掘り込む。南西端、北東端は側面の壁を外側へ折り込む。この中に長さ480cm、幅55cm(土層断面一挿図30-BB'~DD'の第7層の床面での間隔)と推定される組合せ箱式木棺を納める。棺の構築は小口板を南西端、北東端に設けた挟り込みに埋め込んで立てた(その際北東側の小口板のみ床面に溝を設けて埋め立てる)後、長い側板を小口板の間に立てる。この組合せ法を用いると側板が内側へ倒れ易くなる感がある。これは小口板そのものの内側に側板を埋め込む溝を穿つことで解決できるものとする。墳丘を掘り下げ中に墓壇上面の南西側中央で人頭大の自然石が置かれた様な状態で出土した(挿図29、図版8)。標石かと思われる。床面で自然石2(挿図29、図版7)、鉄剣3(F1~3)、刀子1(F21)、

鉄斧(F24)、鋤先1(F25)、鏝1(F26)、鉈1(F27)、曲刃鎌1(F28)、砥石1(S1)、不明荳(F29、F30)が出土した(挿図29、31~33、図版8、9、24~26)。2個の自然石は北東側中央で検出された。床面に密着しており標石の類いが落ち込んだものとは考えられないことから、枕石として使用されたものであろう。この位置が頭位であると思われる。枕石の両脇に鉄剣F1・F2が切先を頭位方向(北東)に向けて置かれる。鉄剣F2の延長線上で棺の中央と思しき位置よりやや南西寄りに鉄剣F3が切先を南西に向けて置かれ、そのそばに刀子F21が切先をF3と同方向に向けて並べられる。F21は刀身と茎が約15cm離れて出土した。鉄斧、鋤先、鏝、鉈、鎌、砥石は南西側中央辺りに集められ

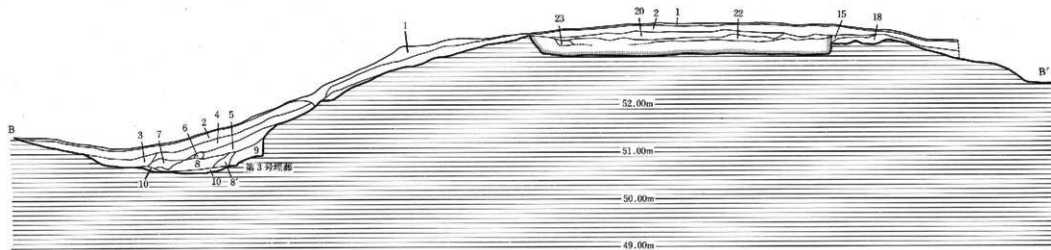
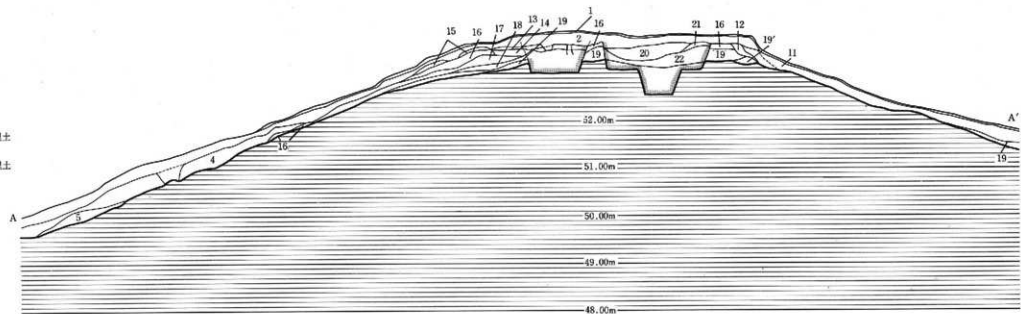


挿図26 33号墳掘り割り内壺形土器・鉄斧出土状況図

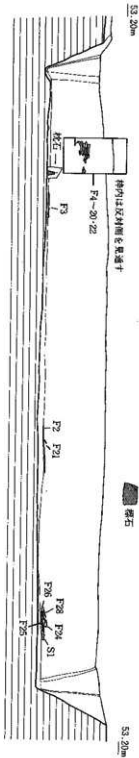
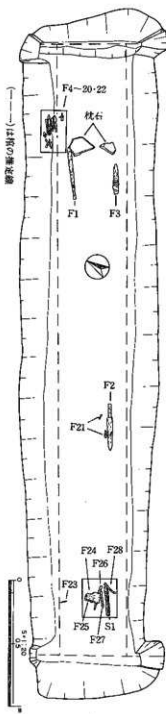
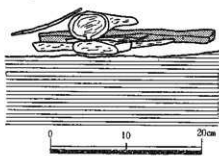
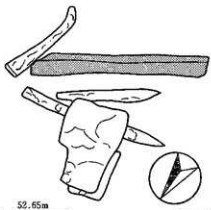
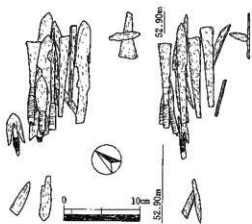


挿図27 33号墳墳丘模式図

- 1. 黄土(腐植土)
- 2. 暗灰褐色土(ややしまる、流出している)
- 3. 淡味褐色土
- 4. 黒色土(しまりが悪い)
- 5. 淡味褐色土(よくしまる)
- 6. 黒山アロックス
- 7. 淡褐色土(しまりが悪い)
- 8. 暗褐色土
- 9. 暗褐色土(しまりが悪い)
- 10. 暗褐色土(しまりが悪い)
- 11. 淡褐色土(極めてしまりが悪い)
- 12. 褐色土(極めてしまりが悪い)
- 13. 淡褐色土(よくしまる)
- 14. 淡味褐色土(しまりが悪い)
- 15. 暗褐色土(よくしまる)
- 16. 暗褐色土(よくしまる)
- 17. 暗褐色土(よくしまる)
- 18. 暗褐色土(よくしまる)
- 19. 暗褐色土(よくしまる)
- 20. 暗褐色土(極めてしまりが悪い)
- 21. 暗褐色土(黒炭を含みしまりが悪い)
- 22. 暗褐色土(ややしまる)
- 23. 暗褐色土(しまりが悪い)
- 24. 暗褐色土(ややしまりが悪い)
- 25. 暗褐色土(しまりが悪い)



挿図28 33号墳丘陵土層断面図



挿図29 33号墳第1号埋葬施設遺物出土状況図

た様子で出土した。鉄斧と鋤先は重なり、その下に鑿が置かれる。刃先の方向は鉄斧、鎌が南東、鋤が南西、鋤先、鑿が北東と統一性がない。頭位付近北西側の掘り込み屑から20cm下った辺りで鉄鍬(F4~20)が出土した(挿図29、31、32、図版9、24、26)。全て平根に属し有頭のものが多いが

大部分を占め無頭のものも2点に止まる。内側へ流れ込む状態で出土したが、本来は切先を北東に向けて整然と並べられていたものと思われる。出土した位置、レベルより鉄鍬は棺がある程度埋められた時点で棺に添える様に置かれたものであると考える。以上の様に第1号埋葬施設より出土した鉄器はバラエティーに富んでいるのであるが、その配置は遺体の両脇に武器、足位方向に農具というものである。

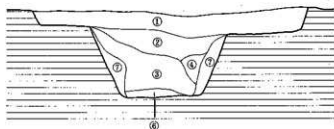
第2号埋葬施設(挿図34、35、図版10、26)は墳頂部の南東側で検出され、第1号埋葬施設に寄り添う様に位置する。第1号埋葬施設が墳頂部平坦面の中央部ではなく北西側に寄せて設けられ、第2号埋葬施設はこれによって空く部分の北東側を占めている。この事から第2号埋葬施設構築は第1号埋葬施設構築時に考慮に入れられていたものと思われる。第2号埋葬施設は主軸をN-60°-Eにとり、北西側が膨らむ隅丸長方形を呈

する。墓壇は長さ285cm、幅140cmの規模でほぼ垂直に20cm以上掘り込まれた後テラスを造り、さらに長さ183cm、幅55cmの平面規模で26cm前後掘り込まれる。土層断面に痕跡は残っていないが、箱式木棺が納められたと考えられる。墓壇の北東側小口部には拳大の自然石が6個、中央がやや

- ① 暗褐色土(径3mmの小礫を多量に含みややしる)
- ② 暗褐色土(径3mmの小礫を多量に含みややしる)
- ③ 暗褐色土(径3mmの小礫を多量に含みややしる)
- ④ 暗褐色土(しりやがわい)
- ⑤ 暗褐色土(径3mmの小礫を多量に含みややしる)
- ⑥ 暗褐色土
- ⑦ 暗褐色土

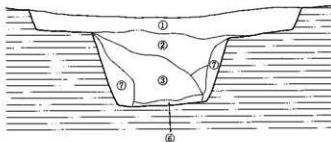
B 53.50m

53.50m B'



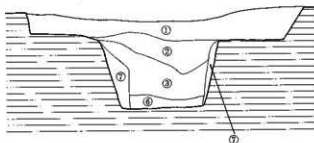
C 53.50m

53.50m C'



D 53.50m

53.50m D'



A. 53.50m

53.50m A'

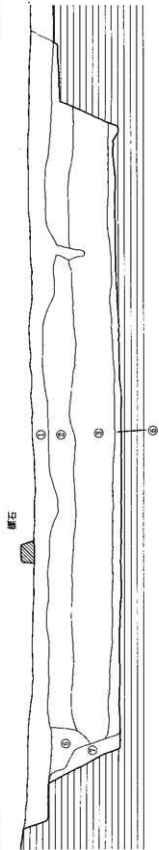
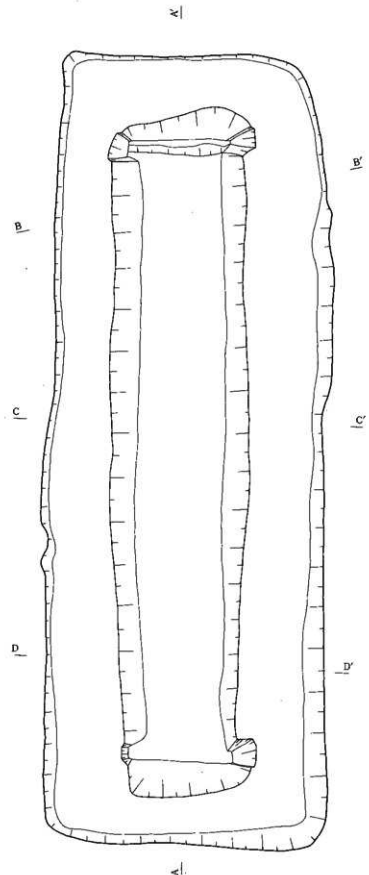


插图30 33号坑第1号埋葬施設実測图



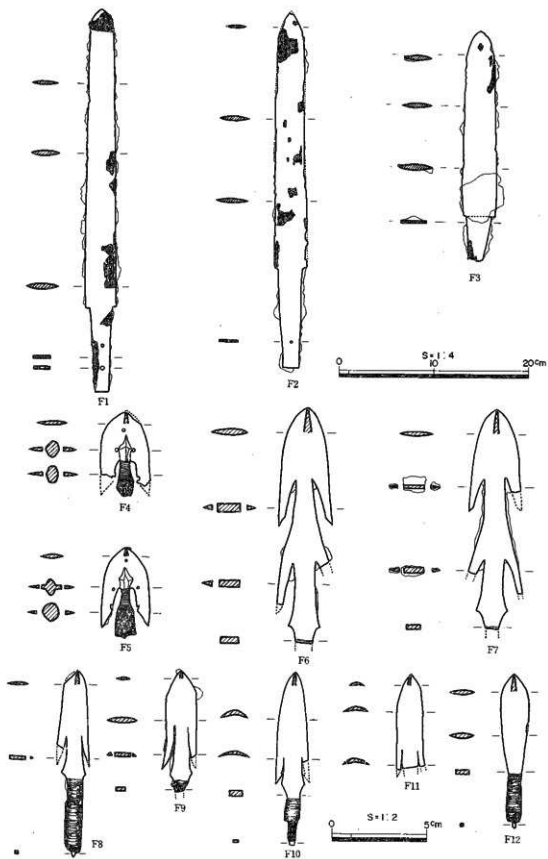


插图31 33号墳第1号埋葬施設出土鉄器実測図①

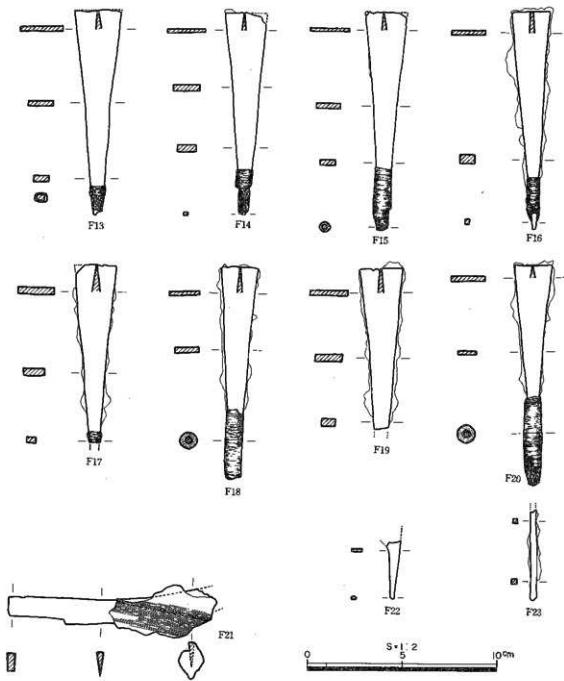


插图32 33号墳第1号埋葬施設出土鉄器実測図②

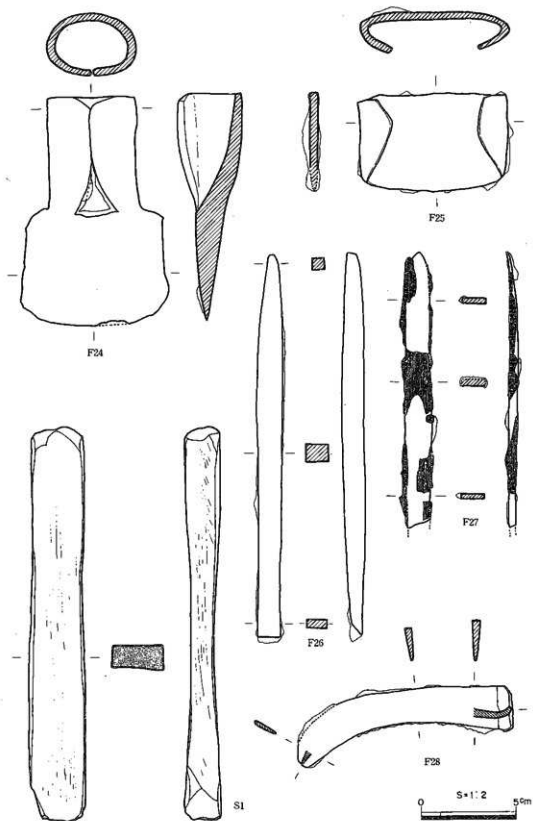
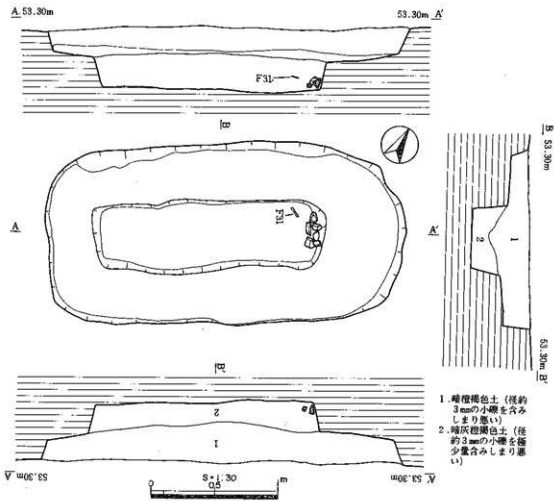
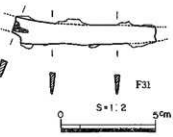


插图33 33号墳第1号埋葬施設出土鉄器類実測図③



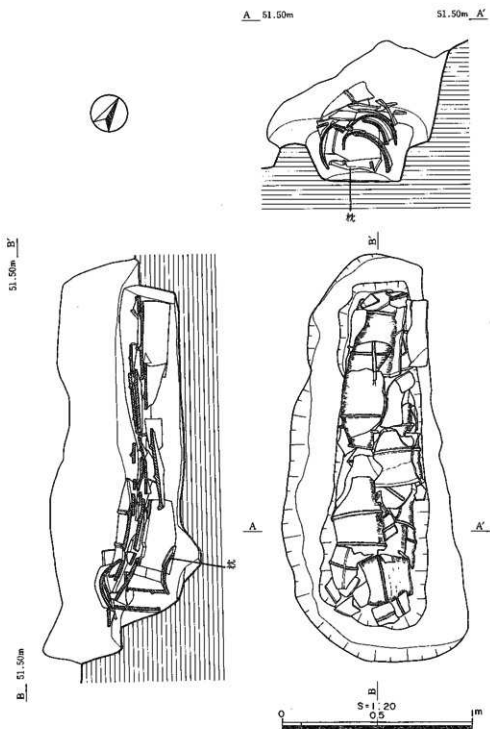
挿図34 33号墳第2号埋葬施設実測図

窪む様に集め置かれていた。枕として使用されたもの（枕石）であり、この位置が頭位であると思われる。枕石の10cm程西寄り、北西壁際で刀子（F31—挿図35、図版26）が切先を内側へ向けて出土した。床面から10cm以上浮いており、第1号埋葬施設における鉄鎌と同様に棺がある程度埋められた時点で切先を頭位方向へ向けて棺に添えられたもので、棺材の腐朽に伴って内側へ落ち込んだものと思われる。



挿図35 33号墳第2号埋葬施設出土鉄器実測図

第3号埋葬施設（挿図36、42～45、図版11、27、28）は北東側墳裾部で検出された埴輪を使用する埋葬施設である。墳丘斜面を50cm前後掘り込んで平坦面を造った後に長さ182cm、最大幅56cm、深さ18cm前後の南東側が広がる隅丸長方形の基壇を掘り込み、基壇の上面を縦割りにした埴輪（Po4～14）で覆うものである。主軸はN-43°-Wをとる。基壇の南東側はPo6、Po9片を小口部に立てた後、下からPo7、Po8、Po6を主に用いて覆う。北西側はPo5を、中央部はPo4、Po9を主に用いて覆う（挿図42～45、図版27）。基壇を覆う埴輪片を取り上げたところ、南東側小口部



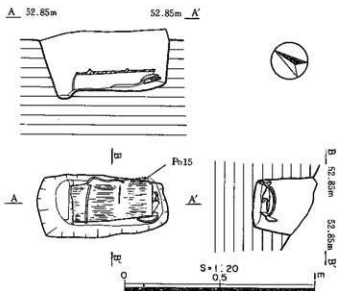
挿圖36 33号墳第3号埋葬施設実測図

でPo6片が外面を上に向けて置かれていた(図版11)。やや浮いているが(挿図36)、出土状況から枕と考える。頭位はこの位置であろう。枕の下で長さ30cm、幅30cm前後の溝状の掘り込みを検出した。用途等は不明である。第3号埋葬施設に使用された埴輪は基底を残すものがないことから、本来立っていたものを再利用したものと考えられる。33号墳の墳丘は埴輪をもった形跡が全く見られないので、これらの埴輪は他の古墳から運んだものとする。

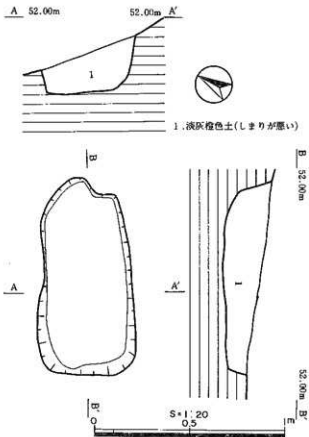
第4号埋葬施設(挿図37、46、図版12、28)は南西側墳裾部で検出された。上縁部で長さ68cm、最大幅33cm、深さ25cm前後の北西側が広がる隅丸長方形の墓室内に縦割りにした埴輪片(Po15—挿図46、図版28)が外面を上に向けて入っていた。主軸はN-36°-Eをとる。南東側小口部は同じ埴輪を打ち割った破片を用いて塞ぐ。埴輪片を取り上げたところ、北西側小口部床面で長さ21cm、幅9cm、深さ7cm前後の半月状の掘り込みを検出した。

第5号埋葬施設(挿図38、図版12)は北西側の墳裾と思しき位置で検出した。上縁部で長さ104cm、最大幅41cm、深さが最大20cmの索掘りの土壌墓である。平面形は北東側が狭まるいびつな隅丸長方形で、主軸はN-54°-Eをとる。遺物は全く出土しなかった。

北東側掘り割り内でPo1~3(挿図40、41、図版28)が22~30cmの距



挿図37 33号墳第4号埋葬施設実測図



挿図38 33号墳第5号埋葬施設実測図

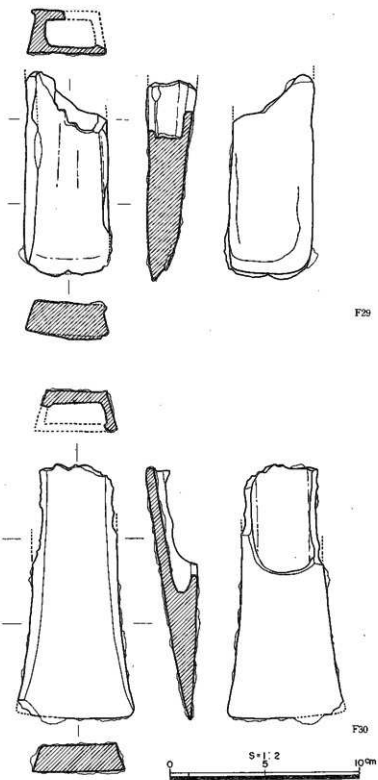
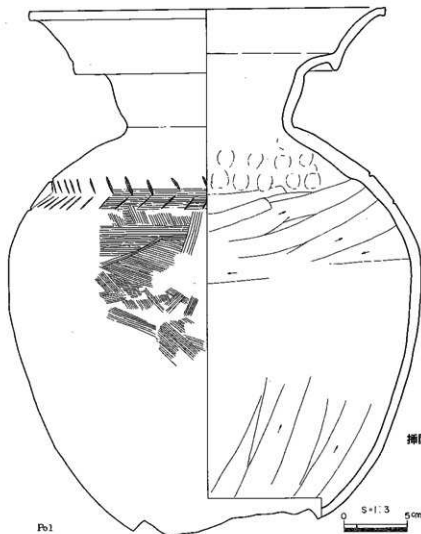


插图39 33号出土铁斧头图

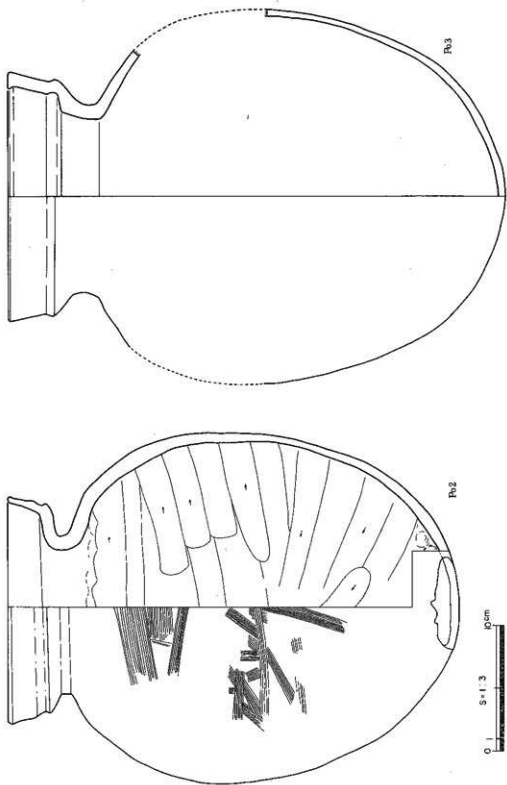
離において墳裾線に沿う様に出土した(挿図26、27、図版13)。Po1、Po2は完形の土器で焼成後に底部穿孔されている。付近で出土した土器片で孔を塞ぐことができた。現地で穿孔して置いたものであろう。又、Po1には長さ20cm、幅15cm程度の山石(アブライト)1個、Po2には長さ15cm、幅9cm程の河原石(流紋岩質凝灰岩)と長さ15cm、幅5cm程の山石(アブライト)が1個ずつ底部から4cm程浮くかたちで入れ込まれていた。Po3は口縁部が胴部に落ち込んだ様なかたちで出土した。土圧によって口縁部が落ち込んだのであろうが、破片は既に散失しており、口縁部と底部の復原だけに止った。Po1から西へ60cm程離れたところで鑄造鉄斧(F29—挿図39、図版26)が出土した。掘り割りの底面に密着し、刃先を東へ向けて出土した(挿図26、27、図版13)。Po1～3、F29を囲む様な土墳墓が存在した可能性はあるが、推測の域を出ない。鑄造鉄斧は墳丘の北西側でも出土した(F30—挿図39、図版26)。

33号墳はPo1～3等より古墳時代中期の築造と考えられる。

註1 剣(F2、F3)の位置は遺体の肩部付近に相当すると考えられるのであるが、剣の間隔が30cmと狭い。30cmの間にそのままの遺体が入るとは考えられないことから、再葬の可能性をここで掲げておく。



挿図40 33号墳掘り割り
内出土土器実測図①



挿図41 33号埴摺り甔り内出土陶器類図②

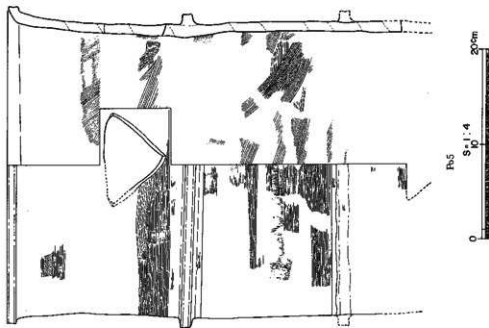
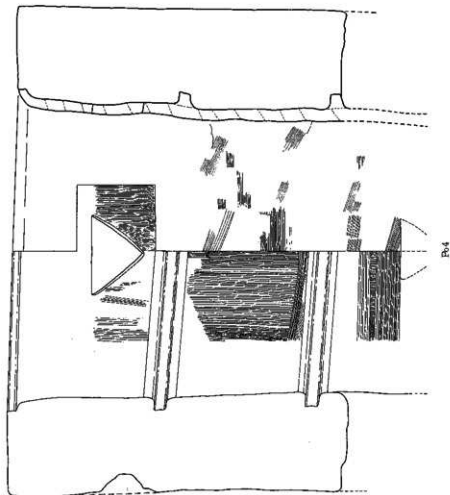
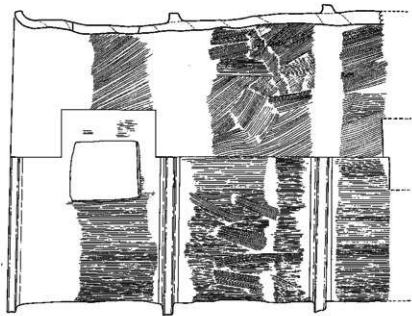


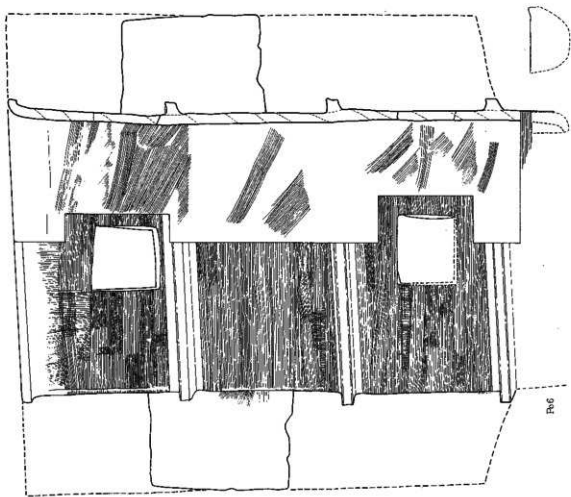
插图42 33号墳第3号埴轮施設出土土器竹門面埴轮実測図①



Fv7

0 5 10 20cm

S:1:4



Fv6

插图43 35号墳第3号埋葬施設出土榎竹円筒構造実測図②

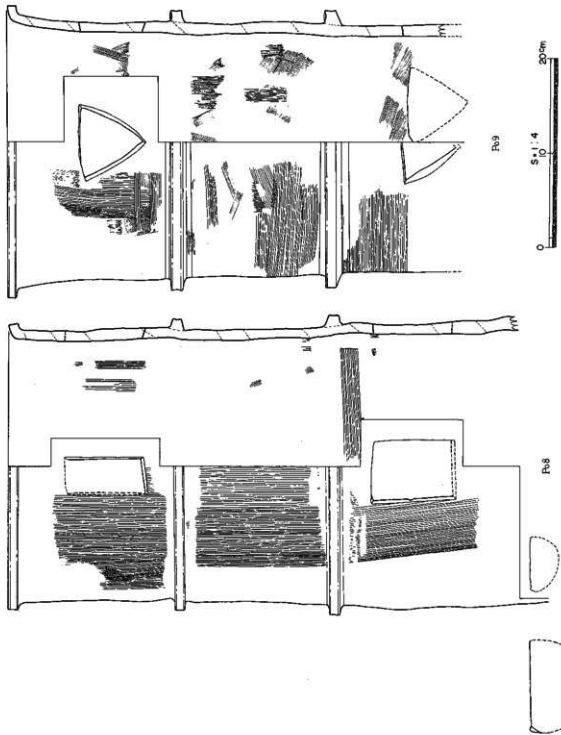
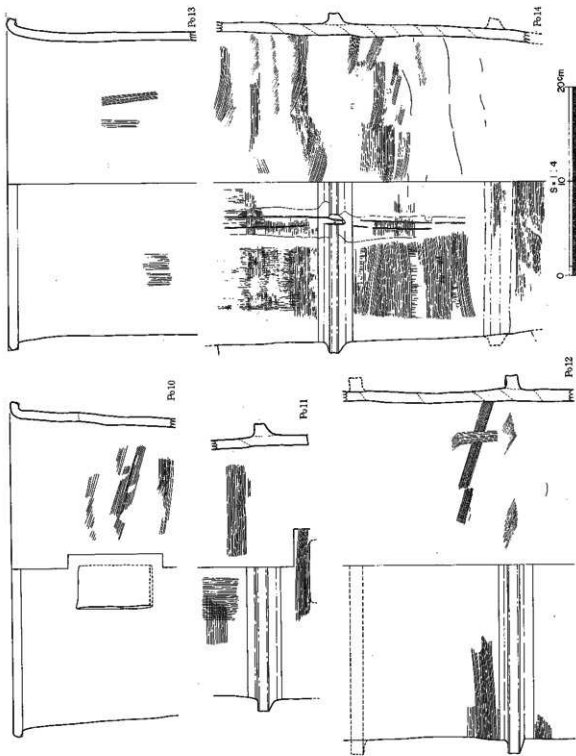
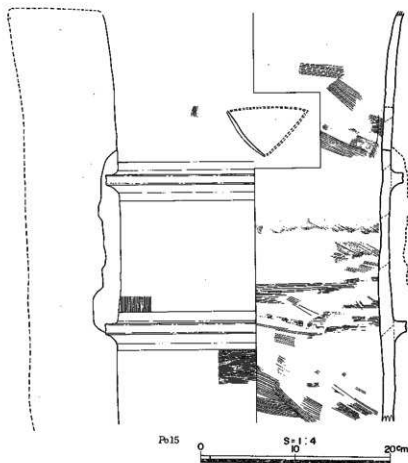


图44 33号坑第3号埋葬坑出土陶俑的实测图



葬图45 33号坑第3号埋葬坑施設出土罐类测图



挿図46 33号墳第4号埋葬施設出土土器付円首輪軸実測図

遺物・出土物 図記番号	出土遺構	部 類	①寸法 ②重量 ③材質 ④出土層	形 態	予 測	胎 土	焼成	色 調	備 考
Po1 40 28	33号墳掘り崩り内	甕	①28.1 ②43.4 ③27.7	横断面に穿孔された丸底の甕部から、腹入を有する広くに有する胴部に至る。胴部はなだらかで、半円形に穿孔する縁の縁部に達する。広く外反する口縁部は下平ら面をもち下腹に下方へ一まみ出す。甕部外面に木目状の具による刻み目がある。	外面は胴部に、ナメハラ、ヨコハクが焼る。甕部下部部にココハクの後、窪みを施す。甕部上平ら面に口縁部にかけてココナテ。内面は甕部以下へ凹みの付く。胴部は左側のヘラケズリがみられる。甕部に行じへのヘラケズリ。甕部上平ら面に焼跡がみられる。胴部から口縁にかけてはココナテ。	良、砂粒を含む。	良好	黄褐色	1) 甕部内外面に黒色塗有り。
Po2 41 28	33号墳掘り崩り内	甕	①17.9 ②35.7 ③27.3	横断面に穿孔された丸底の甕部から腹縁部まで焼る。なだらかな胴部に至る。口縁部は広く外反する。口縁部表面の紋は強く、胴部は丸くおさめ。	外面は胴部・甕部にヨコ・ナメハラが焼る。甕部上腹より口縁部までココナテ。内面は甕部に焼おさめ。胴部ややまで左へ凹みのヘラケズリ。甕部まで左へ凹みのヘラケズリ。甕部下は、焼おさめ。これより上はココナテ。	精良、小砂粒を含む。	良好	淡褐色	
Po3 41 28	33号墳掘り崩り内	甕	①19.7 ②40.0g	甕部と胴部より上が焼る。丸底の甕部、胴部の焼りが小さい。腹の空室からわずかに外側する筒状口縁部に至る。口縁部表面の紋は強く、内面に窪いけほみがある。胴部は肥厚し上面にテラスを持つ。	胴部から口縁部までココナテ。	精良、小砂粒を含む。	良好	外面は淡褐色	
Po4 42 27	33号墳掘り崩り施設	腰付円口短輪	①24.1 ②11.4 ③30.2 ④1.7 ⑤1.6	横すする胴部、第3内帯上方より口縁部に向けてわずかに外方へ開く。口縁部には平帯状を呈する。心帯はよく発達し筋帯(筋、帯、第2帯、第4帯)に第3帯の筋の透し孔が同方向内、それぞれ対応する位置に2個づつ穿れる。幅縁は最大10.6cm。	外面・第2帯・ナメハラ後ココハク第3帯ナメハラ後、第2凸帯近(くのみココハク、第4帯ナメハラのみ)と焼る。それぞれの内帯の上平ら面は、ココナテによって焼付が認められる。焼物落帯には刀状の具による斜り付け跡及びココハラがみられる。内面はココハク、ナメハラ、ナテがみられる。特に口縁部は強くココナテされる。	良、砂粒を含む。	良好	淡明茶褐色	外面に黒色塗及び赤色塗有り。

挿表 3—① 33号墳出土土器観察表

遺物番号 出土地点 図録番号	出土遺物	種類	口部 形状 高さ 口径 底径 重量	形 態	手 法	胎土	焼成	色調	備考
Po 5 42 27	33号墳第 3号埴器 埴輪	埴付内筒 埴輪	①33.5 ②41.7 ③1.2 ④1.1	直立する胴部。第3凸帯上方より口縁部に向ってわずかに外方へ傾く。口縁部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し断面「M」形。第2段、第4段に逆三角形の透し孔が、同方向に、それぞれ対向する位置に2個ずつ穿れる。	外面—第2段は割れているがココハクがわずかに残る。第3段、第4段はココハクがほぼココハク。割れ部には刀子状工具による割り付け痕、ココハク、ナメメハク、ナメメハク、ナメメハクがみられる。特に口縁部は強くココナダされる。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄茶褐色	外面に黒線有り。
Po 6 43 27	33号墳第 3号埴器 埴輪	埴付内筒 埴輪	①32.0 ②55.9 ③39.0 ④1.4 ⑤1.6	直立する胴部。口縁部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し断面「M」形。第2段、第4段に逆三角形の透し孔が同方向に、それぞれ対向する位置に2個ずつ穿れる。第1段には半円形の透し孔が第4段の透し孔と約45°方向を異にして対向する位置に2個穿れる。断面は最大13.6cm。	外面—タテハク後ココハク。口縁部と凸帯の上下はハク後ココナダによりココナダが目が見える。内面—ココハク、ココハクがみられる。特に口縁部は強くココナダされる。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	外面に黒線有り。
Po 7 43 27	33号墳第 3号埴器 埴輪	埴付内筒 埴輪	①31.9 ②39.9 ③30.8 ④1.4 ⑤1.2	直立する胴部。口縁部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し断面「M」形。第2段、第4段に逆三角形の透し孔が同方向に、それぞれ対向する位置に2個ずつ穿れる。	外面—第2段・第4段はタテハクのみ。第3段はタテハク・ナメメハクを呈す。口縁部と凸帯の上下はココナダによりココナダが目が見える。内面—ココハク、ナメメハクがみられる。特に口縁部には刀子状工具による割り付け痕、タテハクがみられる。内面—タテハク・ナメメハク、ナメメハクがみられる。特に口縁部は強くココナダされる。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄茶褐色	外面に黒線有り。
Po 8 44 27	33号墳第 3号埴器 埴輪	内筒埴輪	①30.2 ②59.2 ③39.2 ④1.4 ⑤1.3	直立する胴部。口縁部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し断面「M」形。第2段、第4段に逆三角形の透し孔が同方向に、それぞれ対向する位置に2個ずつ穿れる。第1段には半円形の透し孔が第2段、第4段の透し孔と約45°方向を異にして、対向する位置に2個穿れる。	外面—タテハクのみを呈す。口縁部と凸帯の上下はココナダによりココナダが目が見える。内面—ココハクがみられる。特に口縁部は強くココナダされる。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	外面に黒線有り。
Po 9 44 27	33号墳第 3号埴器 埴輪	内筒埴輪	①31.0 ②46.5 ③27.1 ④1.2 ⑤1.6	直立する胴部。第3凸帯上方より口縁部に向ってわずかに外方へ傾く。口縁部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し、断面「M」形。第2段、第4段に逆三角形の透し孔が、同方向に、それぞれややずらぬが対向して穿れる。	外面—タテハク後ココハク。口縁部と凸帯の上下は強いココナダによりココナダが目が見える。(一部ココハクが残る。)内面—ココハク、ナメメハク及びココナダがみられる。特に口縁部は強くココナダされる。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄茶褐色	外面に黒線有り。
Po10 45 28	33号墳第 3号埴器 埴輪	内筒埴輪	①34.8 ②47.5 ③1.0	やや外方へ傾く口縁部。口縁部は扁平化しているが、凸帯は呈していたものと思われる。透し孔は長方形である。	外面—割線が強く不明。内面—ココナダのみが残る。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	
Po11 45 28	33号墳第 3号埴器 埴輪	内筒埴輪	①28.0 ②1.4	直立する胴部。凸帯はよく突出し断面「M」形。透し孔はほぼ正方形の可能性がある。	外面—タテハク後ココハク。凸帯の上下はココナダによりココナダが目が見える。内面—ココハク、ナメメハク及びココナダがみられる。	横良。小砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	外面に黒線有り。
Po12 45 28	33号墳第 3号埴器 埴輪	内筒埴輪	①36.9 ②1.3 ③1.4	直立する胴部。凸帯はよく突出し断面「M」形。	外面—割線しているが、ココハクがみられる。凸帯の上下はココナダによりココハクが残り残る。内面—ココハク、ナメメハク及びココナダがみられる。	良。砂粒を含む。	良好	淡黄茶褐色	外面に黒線有り。
Po13 45 28	33号墳第 3号埴器 埴輪	内筒埴輪	①35.4 ②20.0 ③1.0	直立した体わずかに外方へ傾く口縁部。口縁部は扁平化しているが凸帯状を呈したものである。	内外面ともココナダ。タテハクがわずかに残る。	横良。砂粒を少し含む。	良好	淡黄褐色	
Po14 45 28	33号墳第 3号埴器 埴輪	埴付内筒 埴輪	①34.2 ②1.2	直立する胴部。凸帯は断面「M」形。	外面—タテハクの後ココハク。凸帯の上下はココナダによりハク凸帯が目が見える。凸帯部にはココハクがみられる。割れ部に刀子状工具による割り付け痕及びココハクがみられる。内面—ココハク・ナメメハク及びココナダがみられる。	横良。砂粒を少し含む。	良好	淡黄褐色	外面に黒線有り。
Po15 46 28	33号墳第 4号埴器 埴輪	埴付内筒 埴輪	①31.7 ②43.5 ③2.2 ④1.4 ⑤1.4	直立する胴部。第3凸帯より口縁部に向ってやや外方へ傾く。口縁部は凸帯状を呈する。凸帯はよく突出し断面「M」形。第4段に逆三角形の透し孔有り。第1段は扁平化する。	外面—割線が強くココハクが一部残る凸帯の上下は強くココナダされる。内面—ココハク・ナメメハク及びココナダがみられる。特に口縁部は強くココナダされる。	やや横良。大きな砂粒を含む。	中々不良	外面は明茶褐色。内面は淡黄褐色。下部は明茶褐色。	外面に黒線有り。

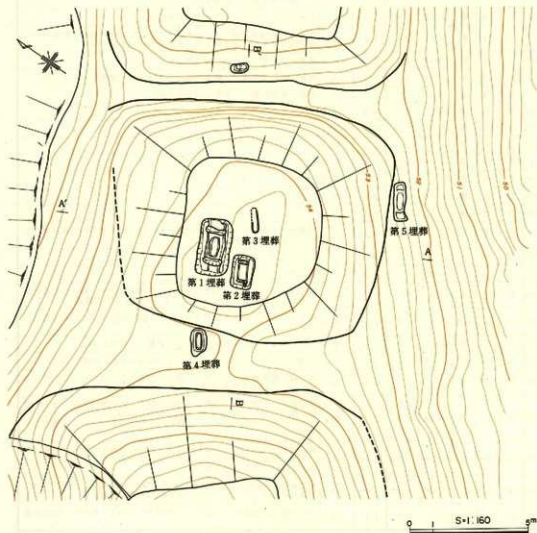
挿表 3—② 33号墳出土土器観察表

遺物 番号	挿入 番号	図版 番号	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
F 1	31	24	剣	40.6	3.3	0.7	164.5	刃部長31.6cm。細身で断面レンズ状の剣身は先細り気味となり切先は丸味をもって先端に至る。両端で先細り気味の茎がつき目釘穴は2箇所。剣身及び茎に木質が付着する。
F 2	31	24	剣	37.5	3.5	0.6	178.5	刃部長27.0cm。細身で断面レンズ状の剣身は切先にアクセントがなく先細り気味となる。両端で先細り気味の茎は剣身に比して長めである。目釘穴は1箇所。剣身に木質が付着する。
F 3	31	24	剣	24.7	3.7	0.8	110.5	刃部長19.8cm。幅広で短い剣身は断面レンズ状で切先にアクセントがなく先細り気味になる。両端で先細り気味の茎がつく。目釘穴は確認できない。剣身及び茎に木質が付着する。
F 4	31	24	鍔	3.9	2.6	0.3	5.4	無頭の広縁長三角形鍔。装着法は鍔身をマッチの状のもので挟みさらに鞘状の木で挟み、それを鞘に挿入した後糸で緊縛するものである。孔を3つもつ。
F 5	31	24	鍔	4.1	2.5	0.3	5.5	同 上
F 6	31	24	鍔	12.5	2.5	0.4	26.6	有頭の両丸造り長三角形鍔式の鍔形のものといえようか。腹板が2段につく。茎に鍔を有し、緊縛用の木皮がわずかに残る。
F 7	31	24	鍔	11.6	2.6	0.4	25.7	同 上
F 8	31	24	鍔	9.9	1.5	0.3	10.5	有頭の両丸造り葉巻式。茎に鍔を有する。装着法は茎を篠竹に挿入した後木皮を巻いて緊縛するものである。
F 9	31	24	鍔	6.3	1.6	0.3	7.2	F 8 に比して切先にアクセントを持つ他は同上。
F 10	31	24	鍔	9.1	1.7	0.3	7.4	有頭の片丸造り葉巻式。F 8 F 9 に比して鍔身を細身で断面が「へ」の字状を呈する。茎に鍔を有する。装着法はF 8 と同じ。
F 11	31	24	鍔	4.9	1.4	0.2	4.6	装着法は不明であるが、他は同上。
F 12	31	24	鍔	8.2	1.5	0.3	6.3	有頭の両丸造り葉巻式。鍔身を幅広気味である。装着法はF 8 と同じ。
F 13	32	24	鍔	8.2	2.4	0.3	21.6	有頭の芦箭広板式。装着法はF 8 と同じ。
F 14	32	24	鍔	10.7	2.1	0.4	20.7	同 上
F 15	32	24	鍔	11.6	2.1	0.3	19.1	同 上
F 16	32	24	鍔	11.7	2.1	0.5	20.1	同 上
F 17	32	24	鍔	9.4	2.1	0.4	17.4	同 上
F 18	32	24	鍔	11.2	1.9	0.3	17.6	同 上
F 19	32	24	鍔	8.5	2.2	0.4	19.5	同 上
F 20	32	24	鍔	11.7	2.0	0.3	15.0	同 上
F 21	32	25	刀子	11.0	1.4	0.5	20.8	刃部長は8cm以上。斜角片側で茎尻は一字状である。刀身は反りをもち木質の付着がみられる。
F 22	32	—	—	3.0	0.7	0.2	1.2	刀子の茎か。
F 23	32	—	—	4.8	0.4	0.3	1.4	鍔の茎か。
F 24	33	25	斧	12.0	7.7	1.5	352.5	折り曲げてつくられる筈状の袋部をもつ有首の手斧。首はなで肩気味である。刃部は幅7.5cm。中ぶくろみで弧状を呈する鍛造。
F 25	33	25	鑿先	5.2	7.9	0.4	82.6	両サイドを折り曲げて装着する。刃部は幅7.1cm。中ぶくろみで弧状を呈する。
F 26	33	25	鑿	20.2	1.3	1.0	98.0	方柱状をなし先端が薄くなる片刃の鑿。刃幅は1.2cm。
F 27	33	25	鉋	14.4	1.4	0.4	25.3	先端がゆるやかに外反する。刃先まで両面に木質が付着する。
F 28	33	25	鎌	11.4	2.3	0.4	26.7	曲刃鎌。柄装部を刃先を左に置いた状態で上に折り曲げる。柄は刃部に対してほぼ直角につけられたものと考えられる。
F 29	35	25	斧	10.5	4.4	2.2	189.0	鍛造鉄斧。刃部に向って楕円に開き、断面形は楕形となる。側面は楔状を呈し、側面から刃部にかけて鑄型合せ目の「こうばり」がみられる。袋部を欠損し、全体にヒビ割れが進んでいる。現在化学分析中。
F 30	34	25	斧	13.3	5.6	1.9	272.0	鍛造鉄斧。刃部に向って楕円に開き、断面形は楕形となる。側面は楔状で刃部は僅かに片刃となる。袋部を欠損するが、全体に錆化は著しくない。現在化学分析中。
F 31	34	25	刀子	7.6	1.3	0.3	8.5	刃部長は7.2cm以上。無角気味の斜角片側をもつ。茎尻は不明である。刀身は反りをもつ。茎の部分に炭方向の木質が付着する。
S 1	33	25	砥石	20.9	2.8	1.4	201.5	石材は漢文岩質凝灰岩。四面とも使用されていると思われ、面の中央部がくぼむ。

挿表4 33号出土鉄器・砥石観察表（※印 残存値）

第4節 里仁34号墳 (挿図47～50、図版14～16)

里仁34号墳は北東へのびる尾根上にあつて、北東側を33号墳、南西側を35号墳と接している。墳頂部の標高は54.56mで水田部との比高差40m前後を測る。墳丘は尾根主軸に直交する掘り割りにより区画され、地山を整形して形成されている。現状では墳頂部には25cm程度の盛土しかみとめられない(挿図48)。この墳丘を画する掘り割りが北東側で深さ0.8mに及ぶのに対して、南西側は僅かに深さ0.15m程の窪みがみられるにすぎず、34号墳の墳頂部からほぼ水平に続いて、35号墳の北東側墳裾となっている。これにより34号墳は35号墳を後方部とした前方後方墳の前方部ではないかとも考えられたが(挿図66)、くびれ部に相当する部分での墳丘整形が不明瞭なことから35号墳の主軸がずれるため、一応独立した方墳としておく。このように南東側墳裾の掘り込みが不十分なため、墳丘の平面形は、北東側を底辺とした梯形を呈しており、北東側一辺11m、南西側一辺8mのややいびつな方墳となる(挿図47)。高さは北東側掘り割り底面から最大2.1mを測

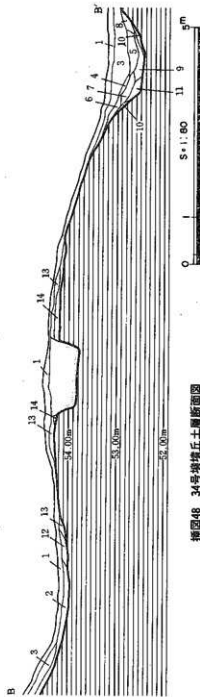
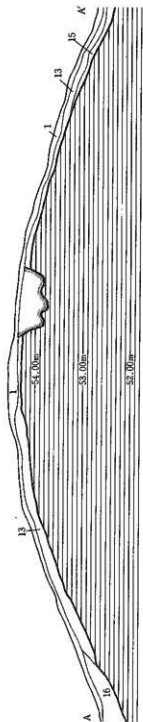


挿図47 34号墳墳丘実測図

- 11. 淡赤褐色土(しまりが少ない、白色粒を多く含む)
- 12. 褐色土(しまっていない)
- 13. 暗赤褐色土(しまっている)
- 14. 暗赤褐色土(ややしまっている、白色粒を含む)
- 15. 暗赤褐色土(ややしまっている)
- 16. 淡褐色土(よくしまっている)

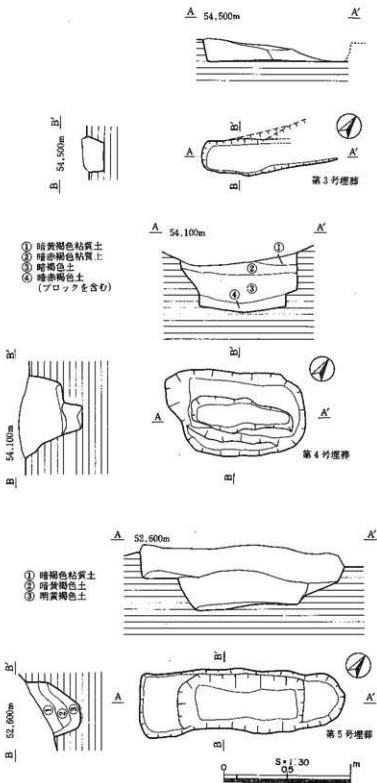
- 6. 暗褐色土
- 7. 暗赤褐色土
- 8. 暗褐色土
- 9. 暗赤褐色土(しまりが少ない、白色粒を含む)
- 10. 淡赤褐色土(ややしまっている、白色粒を含む)

- 1. 赤土-淡灰褐色土
- 2. 暗赤灰褐色土
- 3. 暗赤褐色土(よくしまっている)
- 4. 暗赤褐色土
- 5. 暗褐色土



擇圖48 34号墳丘土層断面図

る。埋葬施設は墳頂部に3基、墳裾部に2基検出された。第1埋葬施設(挿図49、図版15)は、墳頂部中央よりやや北西に位置しており、上縁で長さ238cm、幅137cm、深さ40cm前後の主軸をN-65°-Eにとる長方形墓墳内に長さ110cm、幅70cmの組合せ箱式木棺を納めたものと考えられる。北東側と南西側に深さ25cmの小口板を埋め立てた掘り込みがみられ、両側板の位置も7cm前後掘り込まれており、木棺内は周囲より5cm前後高くなっている。注目されるのはこの木棺内床面に、主軸をN-71°-Eにとる長さ77cm、幅34cm、深さ16cmの掘り込みがみられたことであり、このような構造の類例を知らない。この土壤が埋葬施設本体で、木棺と思われたのは棺を囲う木柵であった可能性もある。第2号埋葬施設(挿図49、図版15)は、第1号埋葬施設の南東に接しており、主軸をN-64°-Eにとる長さ140cm、幅97cm、深さ49cmの墓墳に長さ80cm、幅30cm前後の組合せ箱式木棺が納められていたと思われる。底面には両小口板を埋め立てた掘り込みがみられ、木棺内と思われる中央部は周囲より5cm前後低くなっている。側板はこの両端に立てられたものと



挿図50 34号墳第3・4・5号埋葬施設実測図

考えられる。第3号埋葬施設(挿図50)は第1号埋葬施設の東、第2号埋葬施設の北東に約1mの間隔をとって設けられた素掘りの土壌で、北東側が失われているが残存長108cm、幅30cm、深さ17cmを測り主軸をN-55°-Eにとる。第4号埋葬施設(挿図50、図版16)は35号墳と接する南西墳裾のやや北寄りに位置し、長さ110cm、幅67cm、深さ35cmの隅丸長方形土壌内に長さ80cm、幅27cm、深さ14cmの掘り込みがあり、主軸をN-63°-Eにとる二段掘り土壌墓である。第5号埋葬施設(挿図50、図版16)は、南西側墳裾にあり、長さ162cm、幅50cm、深さ20cmの舟形を呈する墓壇内に長さ100cm、幅45cm、深さ26cmの掘り込みがある。主軸をN-57°-Eにとり両短辺にテラスの付く二段掘り土壌墓である。このように34号墳においては5基の埋葬施設を検出したが、第3～5号埋葬施設はいずれもごく小規模な土壌墓であり、34号墳の中心主体は第1、2号埋葬施設の箱式木棺であろう。規模からいえば第1号埋葬施設の方が大きいのだが、墳丘の中心にはなく、当初から2基を中心に配置することを意図していたものと考えられる。これは32、33号墳にもみられることであるが、前記2墳の埋葬施設に較べて規模、構造とも貧弱であり、副葬品も全く検出されていない。34号墳では埋葬施設、墳丘を含めて、出土遺物は全くみられなかった。したがって時期判定の目安に欠けるが、他の3基の築造時期と大きく懸け離れることはないものと思われる。

第5節 里仁35号墳(挿図51～61、図版17～19、29、30)

里仁35号墳は北東へのびる尾根上にあつて、北東側を34号墳と接している。墳頂部の標高は56.55mで、水田部との比高差40m前後を測る。墳丘は尾根主軸に直交する掘り割りとテラスを設け、地山を整形して墳丘の大半を形成した後に墳頂部に最大60cmの盛土を施している。墳丘を画する掘り割りは南西側において顕著で、幅3m、深さ0.6mに及ぶが、北東側では深さ0.15mと不明瞭であり、僅かな隆起をもつ34号墳墳頂部へとほぼ水平に続いている(挿図54、図版14)。北西側、南東側の墳裾線は確実につかむことができず、墳丘側面がそのまま急な斜面となって降っている。掘り割り底面の高さからすれば標高54m辺が墳裾になると思われるが、本来、北西側、南東側の墳裾線を明確に形成する意志はなかったものと考えられる。但し、北西側は自然崩落と思われる幅12.0m、高さ3.1mにわたる崖面が墳頂部まで及んでいる。墳丘の平面形は狭い尾根幅を一帯に利用しており、長辺18m、短辺13.5m、高さ2.6mを測り、主軸をN-50°-Wにとる長方形墳である(挿図52)。主軸方向は、33、34号墳と約10°ずれており、34号墳と35号墳の境付近で尾根が僅かに屈曲するのに制約されたものであろう。墳頂部には長さ9m、幅6mの平坦面があり、中央部



挿図51 35号墳墳丘出土土器実測図

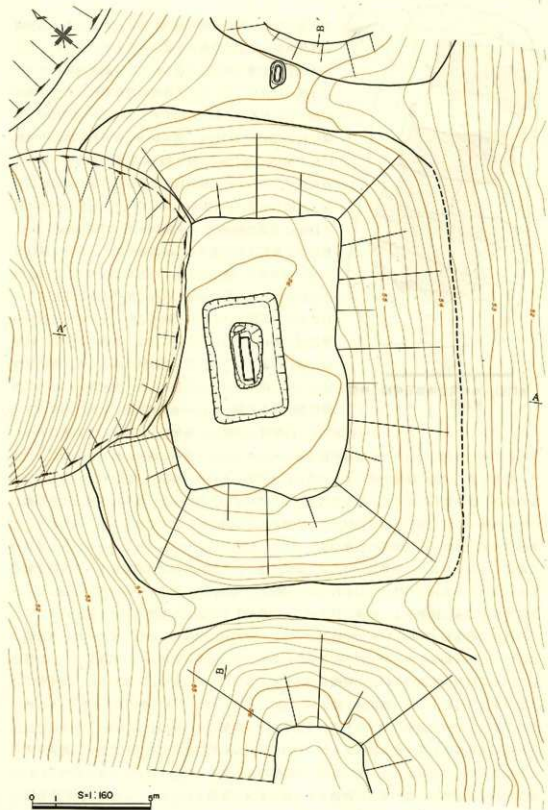
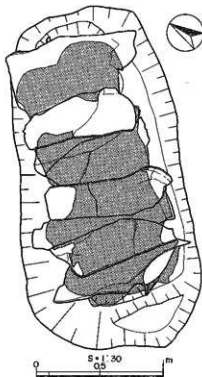
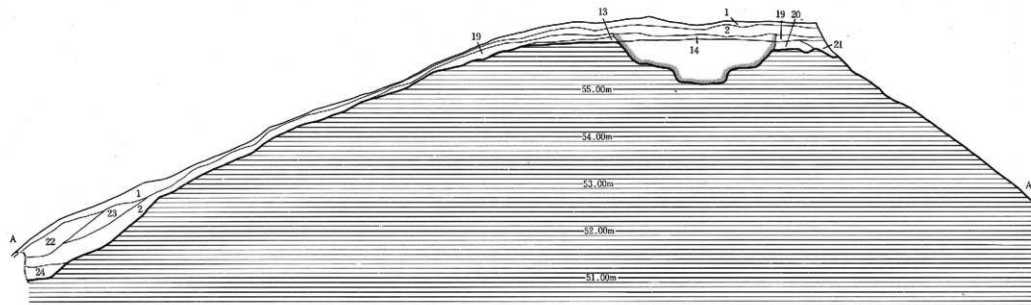


插图52 35号墳丘実測图

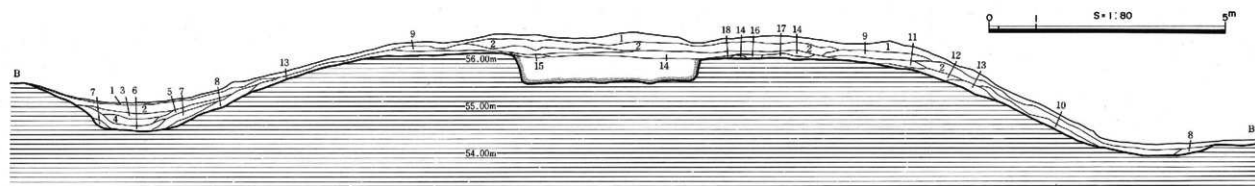


挿図53 35号墳主体部石棺粘土被覆状況図

より僅かに北に寄せて埋葬施設が設けられている。35号墳の埋葬施設は墳頂部中央の1基のみであり、この点、中心主体が2棺並葬を意図して造られており副次埋葬をもつ他の3基とは異なっている。主体部の埋葬形態は大型墓室内に据えられた組合せ箱式石棺である(挿図56、図版18)。墓壇は長さ520cm、幅320cm、深さ40cmの長方形墓壇の中央部に長さ267cm、幅130cm、深さ40cmの胴張り長方形の掘り込みを設け、その中に淡緑灰色を呈する石英安山岩の板石を用いた組合せ箱式石棺が納められていた。石棺は内法で長さ180cm、北東側幅40cm、中央部38cm、南西側幅36cmを測り、敷石から蓋石までの高さは70cm前後を測る。石棺主軸はN 28° Eをとり、墳丘の主軸より約 8° 北にふれている。両小口石は掘り方両端の70cmと40cmの掘り込みに埋め立てられており、両側石は小口石を挟み込むように各々2枚が中央付近で重ね合わせて立てられている。側石の組み立て順序は、側石の重なりからして、北西側は南から北、南東側は北から南へ組んでいったと考えられ、南西側小口石→北西側長側石→北東側小口石→南東側長側石と時計回りの方向に組んでいったようである。2段目掘り方と石棺材との間は、黄褐色～赤褐色の土で裏詰めされ側石、上端、外面には目張りの灰緑色粘土がつめられている。蓋石は横長の板石を最初に4枚置き、板石と板石の間の隙間を塞ぐようにさらに3枚重ねており(挿図55、図版18)、小口石、側石との継ぎ目から蓋石にかけて、粘土で目張りがなされていた(挿図53)。棺内は2枚の大きな敷石が敷かれ両小口辺と側石の継ぎ目付近には小型の石片が敷かれ、さらに粘土が張られており、北東側では粘土表面に赤色顔料の痕跡が残っていた。棺内に流入土はみられなかったが、人骨は全く遺存していなかった。副葬品としては、頭位と思われる棺内北隅には壜罎K1・2と碧玉製管玉6、ガラス小玉48が一括しておかれていた(挿図57、図版19)。北西半分の両側石添いには、北西に長さ67.5cmの鉄剣F1、南東に長さ82.5cmの鉄剣F2が切先を南西に向けて置かれており、この近辺に壜罎K3・10・11・12が散在していた(挿図57、図版19) 足位と考えられる南西側には、小口石から40cmの中央付近に不明漆膜片があり、この南東側石添いには壜罎K4・13が置かれている。棺内南西端付近には、壜罎8個体K5～9、14～16が集中して検出され、南東側では5枚が重なって出土した(挿図57、図版19)。他に、鉄刀子F3と鉄芯棒状木質品F5・6が検出されており、棺内土選別作業で粘土中から刀子F4を採集した(挿図59、図版30)。副葬品で注目されるのは16本にも及ぶ壜の数であるが、その出土状況も棺内全体に散在的であり、着装を考えられるようなものはなかった。実用品としての壜以外の機能・用途を考えるべきであろう。また、棺外南西小口外側には蓋石直下に鉄鎌F7と鉄斧F8が副葬されており、これらの鉄製農具が棺内副葬遺物とは区別されているのが窺えた。墳丘からは埴輪、墓石等の外表施設は全く検出さ

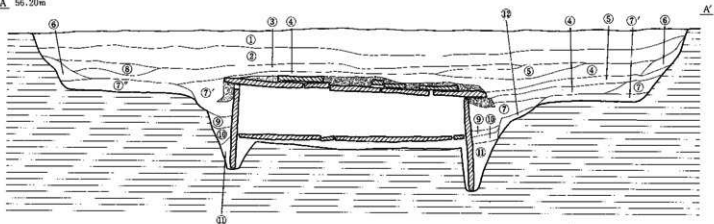


1. 黄土(暗灰色腐植土)
2. 暗黄灰色土(しまっている)
3. 明褐色土(しまっている)
4. 暗褐色土
5. 暗黄褐色土(白色粒多く、しまっている)
6. 暗黄褐色粘質土(しまっている)
7. 明褐色土(白色粒多く、しまっている)
8. 赤褐色粘質土(黄褐色地塊ブロックを含む)
9. 明褐色土(白色粒多し、かたくしまっている)
10. 暗黄褐色土
11. 黄褐色土(ややしまっている)
12. 明褐色土(しまっている、粒子が細かい)
13. 明褐色土(暗赤褐色ブロック白色粒多し、しまっている)
14. 淡赤茶褐色土(白色粒子を含む、かたくしまっている)
15. 明赤茶褐色土(白色粒を含む、ややしまっている)
16. 淡明茶褐色土(砂より細かい粘質を有し、しまっている)
17. 暗黄褐色土(地塊ブロック多く含む、かたくしまっている)
18. 淡赤茶褐色土(白色粒を含む、やや粒性)
19. 明赤茶褐色土(白色粒なし、しまっている)
20. 明茶褐色土
21. 淡赤茶褐色土
22. 暗褐色粘質土(しまりが無い)
23. 暗褐色土(しまりが無い)
24. 暗褐色土(しまりが無い)



挿図54 35号墳境丘土層断面図

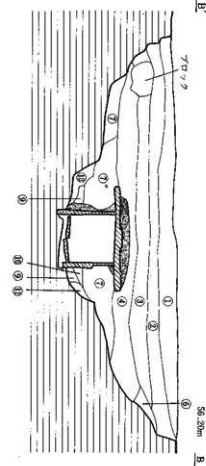
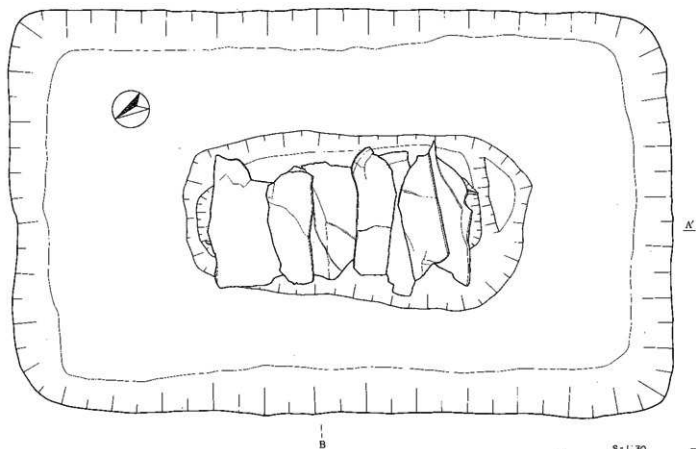
A 56.20m



- ① 暗赤茶褐色土(白砂粒、かたくしまっている)
- ② 暗赤褐色土(白色粒やしまっている)
- ③ 淡黄茶褐色砂質土(しまっている)
- ④ 暗赤茶褐色土(やしまっている)
- ⑤ 暗赤褐色土(やまの混(やしまっている)
- ⑥ 暗赤茶褐色砂質土(しまっている)
- ⑦ 明赤茶褐色土(白色、黄、ブロック多く混入)
- ⑧ やや暗、(や)しまっている
- ⑨ 明黄褐色土(粘質土)
- ⑩ 明赤褐色土(ブロック含む)
- ⑪ 暗赤茶褐色土
- ⑫ 暗赤茶褐色土
- ⑬ 暗赤褐色土(ブロックを多く含む)

 灰緑色粘土

B'



挿図55 35号墳主体部石棺墓石検出状況及び土層断面図

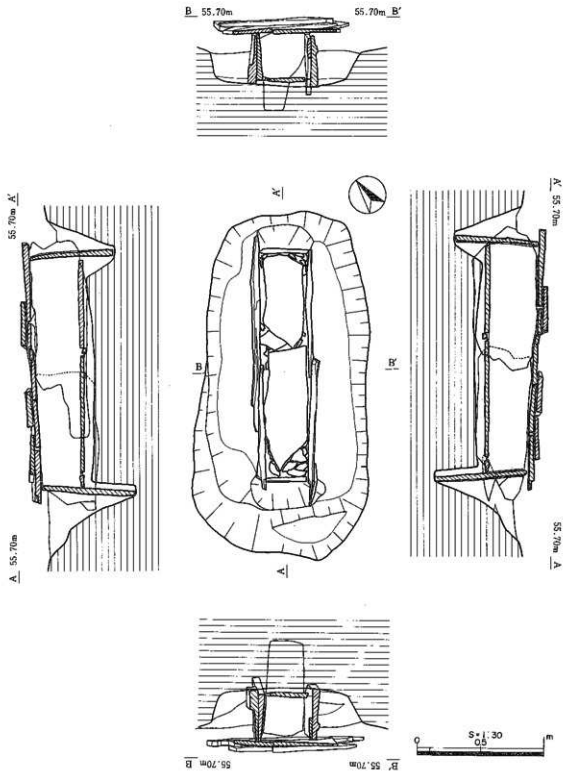
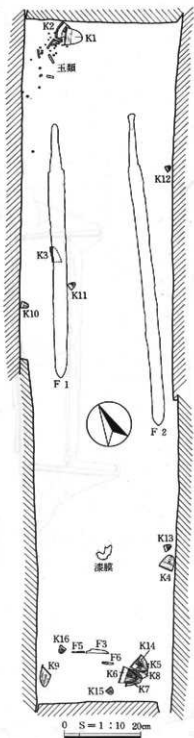
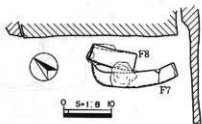


插图59 35号墳主体部石棺实测图



挿図57 35号墳主体部石棺内遺物出土状況図



挿図58 35号墳主体部棺外遺物出土状況図

れなかったが、墳頂部掘り下げ中に丹塗り壺口縁破片Po1（挿図51）が出土している。里仁35号墳は今回調査した4基では最大の規模をもち、立地も最も高い位置にある。土器類の出土が乏しく、35号墳の築造時期は墳丘・埋葬形態・副葬品等から判断せざるを得ないが、特に副葬品では、堅楯は中期古墳に特徴的にみられる遺物であり、剣も剣身が長く、鎌も曲刃で、管玉も細身を呈することから、古墳時代中期の所産と考えてよいであろう。

35号墳の南西側は古墳を想定し、また、その北側斜面も発掘調査を行なったが、古墳・遺構等は全く発見されなかった。古墳群における立地からみて32～34号墳は4基で里仁古墳群中の小支群を形成するとみてよいであろう。



写真3 発掘参加者

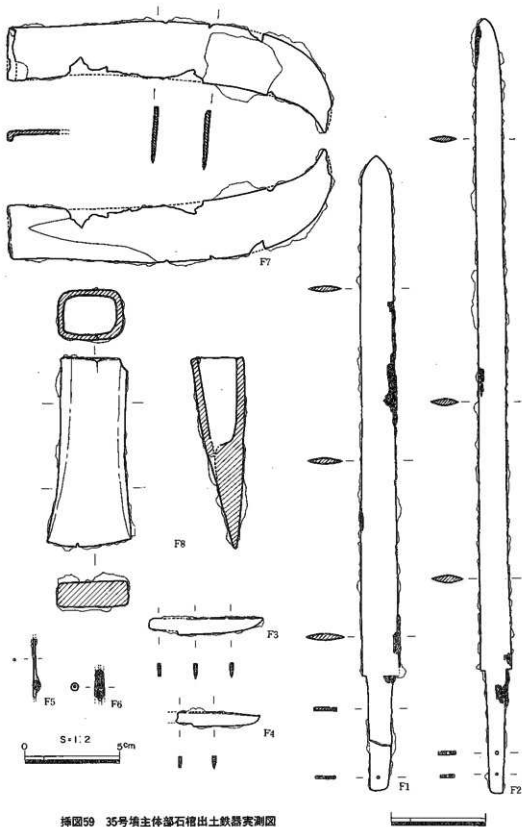
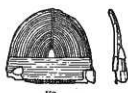


插图59 35号墳主体部石棺出土鉄器実測図



K1



K2



K3



K4



K5



K6



K7



K8



K9



K10



K11



K12



K13



K14



K15



K16



漆膜

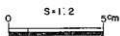
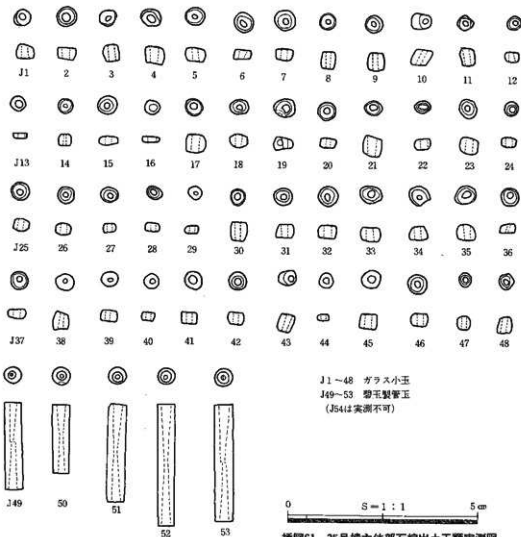


插图60 35号坑主体部石棺出土竖梯突测图



挿図61 35号墳主体部石棺出土玉類実測図

遺物番号 発掘年度 図版番号	出土地層	種類	口部 底面 断面 形状	形	手	法	柄上	装束	色調	備考
Pa1 51	35号墳	骨・1枚	①29.5倍	ハの字に斜め上方に鋭く口縁で、 腕部が少し外反し、口唇部は丸い。		調柄不明。内面に内塗り。	真骨	漆塗り	内面内 塗り	

挿表5 35号墳出土土器観察表

遺物 番号	挿図 番号	図版 番号	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	備	考
F 1	59	30	剣	67.5	3.9	0.7	549.5	刃部長53.3cm。やや幅広く断面レンズ状の剣身は切先がよくらむ。両 側で先細気味の茎がつき、目釘孔は1箇所。刀身および茎に木質が残 存する。	
F 2	59	30	剣	82.5	2.3	0.75	592.0	刃部長69.4cm。細身で断面レンズ状の剣身は切先にアクセントがなく 先細り気味となる。両側で中細気味の茎がつき、目釘孔は2箇所。刀 身および茎に木質が残存する。	
F 3	59	30	刀子	6.0	0.9	0.2	4.0	刃部長4.5cmの小型の刀子。片側で茎尻は葉尻に近い。	
F 4	59	30	刀子	4.4	0.75	0.2	2.5	刃部長3.5cmの小型の刀子。斜角片側で茎尻を欠損する。切先は曲がる。	
F 5	59	30	棒状 鉄器	3.15	0.15	-	0.2	木質が残存しており、F 6同様木質棒状品の芯か？	
F 6	59	30	棒状 鉄器	1.65	0.2 (0.5)	-	0.1	木質棒状品。中心に鉄芯が入るが両端は欠損する。	
F 7	59	30	鎌	17.2	3.2	0.25	63.5	曲刃鎌。柄装着部を刃先を右に置いた場合上に折り曲げる。柄は刃部 に対しほぼ直角につけられたものと考えられる。	
F 8	59	30	斧	10.0	4.4	2.7	137.0	刃部がやや広がる小型の手斧。袋部は折り曲げてつけられているが合 せ目は不明瞭。鍛造である。	

挿表6 35号墳主体部出土土器一覽表 (*は存残値)

透物 番号	結縛部 長さ	幅	厚さ	備考	透物 番号	結縛部 長さ	幅	厚さ	備考
1	4.4	4.9	0.3 0.25	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 漆がやや薄い。遺存状態やや良。	9	3.8	4.6	0.3 0.3	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 漆が厚く。遺存状態良好。26歳
2	3.8	4.6	0.3 0.3	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 漆薄い。遺存状態不良。	10	2.1	2.0	0.2 0.25	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存 良。遺存状態良。
3	4.3	≒2.3	0.25 0.3	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 漆がやや厚いが半分を欠損し破 損大きい。遺存状態不良。	11	2.0	1.9	0.2 0.2	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 遺存状態不良。
4	4.0	4.5	0.2 0.3	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 漆が厚く遺存状態良好。32歳	12	1.9	1.8	0.2 0.2	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 遺存状態不良。
5	4.1	4.1	0.3 0.4	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 漆がやや厚い。遺存状態やや良。	13	2.1	2.0	0.2 0.2	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 遺存状態良。
6	4.2	4.3	0.3 0.2	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 漆が厚く。遺存状態やや良。	14	1.9	1.9	0.2 0.2	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 遺存状態不良。
7	4.05	5.0	0.1 0.3	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 漆が薄い。遺存状態不良。	15	1.8	1.9	0.2 0.2	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 遺存状態不良。
8	4.0	4.7	0.3 0.3	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 漆が厚く。遺存状態良好。	16	1.9	1.9	0.15 0.2	彎曲結縛式、結縛部漆のみ残存。 遺存状態不良。

挿表7 35号墳主体部石棺出土繫帯一覽表(※は残存値)

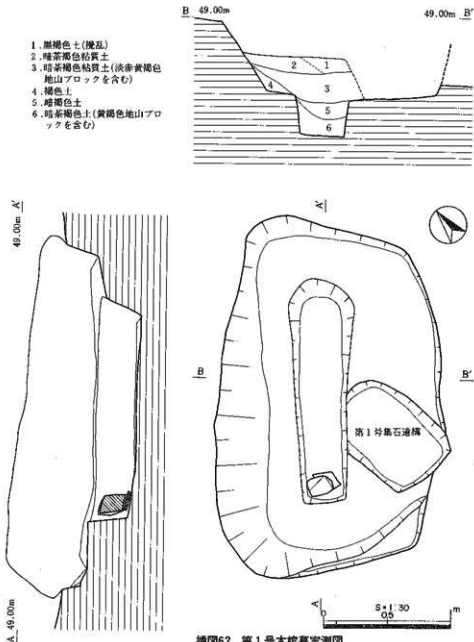
番号	種類	長さ	径	孔径	色	調	材質	番号	種類	長さ	径	孔径	色	調	材質
J1	小玉	0.375	0.47	0.2	淡青色、透明	ガラス	J31	小玉	0.355	0.47	0.13	青色、透明	ガラス		
J2	小玉	0.3	0.51	0.2	淡青色、透明	ガラス	J32	小玉	0.37	0.405	0.2	青色、半透明	ガラス		
J3	小玉	0.375	0.43	0.18	青色、透明	ガラス	J33	小玉	0.365	0.54	0.23	青色、半透明	ガラス		
J4	小玉	0.45	0.515	0.26	青色、半透明	ガラス	J34	小玉	0.3	0.545	0.16	濃青色、透明	ガラス		
J5	小玉	0.3	0.5	0.19	濃青色	ガラス	J35	小玉	0.31	0.48	0.2	淡青色、半透明	ガラス		
J6	小玉	0.25	0.53	0.15	青色、透明	ガラス	J36	小玉	0.2	0.41	0.1	青色、半透明	ガラス		
J7	小玉	0.29	0.52	0.22	青色、透明	ガラス	J37	小玉	0.24	0.465	0.2	濃青色、半透明	ガラス		
J8	小玉	0.48	0.42	0.15	青色、透明	ガラス	J38	小玉	0.47	0.48	0.15	青色、透明	ガラス		
J9	小玉	0.415	0.425	0.14	淡青色、透明	ガラス	J39	小玉	0.28	0.45	0.145	暗青色	ガラス		
J10	小玉	0.42	0.48	0.17	青色、透明	ガラス	J40	小玉	0.19	0.385	0.16	淡緑黄色	ガラス		
J11	小玉	0.46	0.395	0.15	青色、半透明	ガラス	J41	小玉	0.27	0.425	0.205	淡青色、透明	ガラス		
J12	小玉	0.3	0.37	0.08	青色、半透明	ガラス	J42	小玉	0.35	0.46	0.18	青色	ガラス		
J13	小玉	0.17	0.41	0.19	淡青色、透明	ガラス	J43	小玉	0.405	0.39	0.14	青色、透明	ガラス		
J14	小玉	0.35	0.4	0.12	濃青色、半透明	ガラス	J44	小玉	0.2	0.36	0.155	青色、透明	ガラス		
J15	小玉	0.24	0.49	0.17	青色、透明	ガラス	J45	小玉	0.39	0.47	0.195	青色、半透明	ガラス		
J16	小玉	0.17	0.355	0.17	淡青色、半透明	ガラス	J46	小玉	0.37	0.48	0.165	濃青色	ガラス		
J17	小玉	0.42	0.48	0.24	青色、半透明	ガラス	J47	小玉	0.335	0.37	0.13	濃青色、透明	ガラス		
J18	小玉	0.235	0.495	0.165	青色、半透明	ガラス	J48	小玉	0.37	0.405	0.165	青色、半透明	ガラス		
J19	小玉	0.365	0.56	0.12	青色、半透明	ガラス	J49	管玉	2.58	0.46	0.22	淡緑灰色	管玉		
J20	小玉	0.25	0.455	0.15	淡青色、透明	ガラス	J50	管玉	1.82	0.49	0.23 0.185	淡緑灰色	管玉		
J21	小玉	0.425	0.45	0.18	濃青色	ガラス	J51	管玉	2.29	0.42	0.195 0.21	淡緑灰色	管玉		
J22	小玉	0.24	0.44	0.18	青色、透明	ガラス	J52	管玉	3.18	0.42	0.28 0.29	濃緑色	管玉		
J23	小玉	0.35	0.45	0.14	青色、透明	ガラス	J53	管玉	3.03	0.49	0.29 0.25	濃緑色	管玉		
J24	小玉	0.24	0.39	0.17	青色、透明	ガラス	J54	管玉	--	--	--	淡緑灰色	管玉		
J25	小玉	0.23	0.45	0.13	淡青色、半透明	ガラス									
J26	小玉	0.285	0.43	0.16	淡青色、半透明	ガラス									
J27	小玉	0.245	0.395	0.15	青色、透明	ガラス									
J28	小玉	0.2	0.36	0.14	青色、透明	ガラス									
J29	小玉	0.22	0.36	0.115	青色、透明	ガラス									
J30	小玉	0.46	0.43	0.15	暗青色	ガラス									

挿表8 35号墳主体部石棺出土玉類一覽表

第6節 古墳以外の遺構

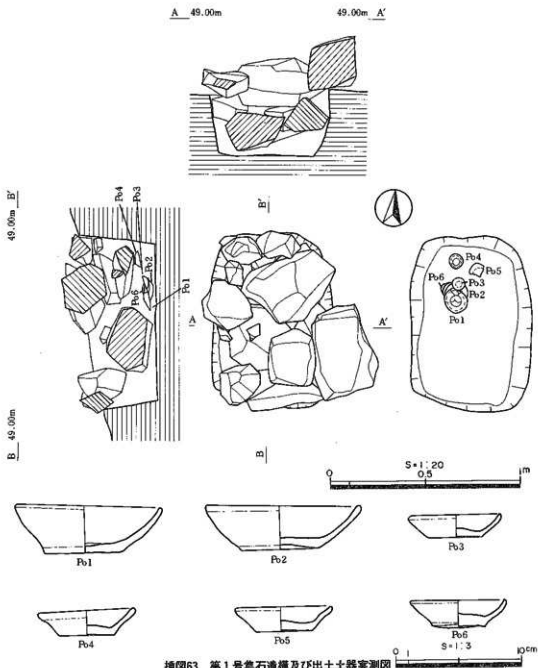
1 第1号木棺墓(挿図62、図版13)

33号墳の東約2m、標高50m付近に位置し、南側を第1号集石遺構によって切られる。長さ275cm、幅175cmの隅丸長方形を呈する2段に掘り込まれた墓墳をもつ。2段目の墓墳は北東側が膨らむ長方形を呈し、上縁で長さ178cm、幅42cmを測る。深さは北西側検出面から91cmを測り、2段目の墓墳は30cm前後の深さをもつ。床面は平坦である。南西側小口部に板状の石(石英安山岩質板状安山岩)、自然石(アブライト)が出土した。

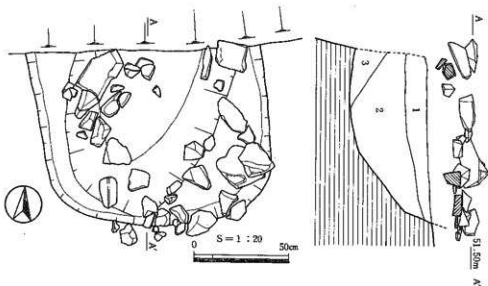


2 第1号集石遺構 (挿図63、図版20、31)

第1号集石遺構は33号墳の南東約2m、標高50m付近にあり、第2号集石遺構の17m南東、第3号集石遺構の11m南に位置する。第1号木棺墓を切って掘り込まれる土壌の中に大小10数個の石が落ち込んでいた。土壌は隅丸長方形を呈し、主軸をN-17°-Wにとる。その規模は上縁部で長さ92cm、幅63cm、深さ35cmを測る。出土遺物は土師製の坏6個体(Po1~6)である。床面上でPo1~3、Po6、床面より10cm程浮いてPo4・5が出土した。中世墓と思われる。



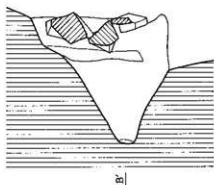
挿図63 第1号集石遺構及び出土土器実測図



1. 灰褐色土
2. 灰茶褐色土(炭を少量含む)
3. 灰褐色土(ややしまる)

A 51.70m

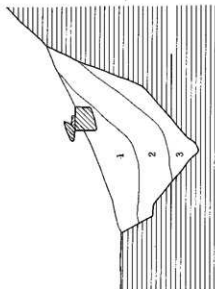
51.70m A'



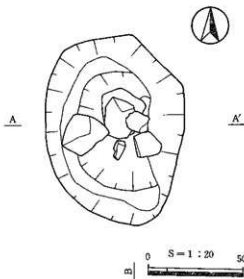
B

1. 時灰褐色土(しまりがわるい)
2. 淡褐色土
3. 淡明黄褐色土

B 51.70m B'



B 51.70m



A

A'

0 S=1:20 50m

挿図64 第2号(上)・第3号(下)集石遺構突測図

3 第2号集石遺構 (挿図64、図版20)

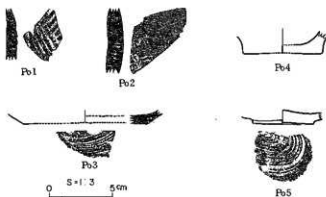
第2号集石遺構は32号墳の南西側墳丘斜面に位置する。北側部が崩れ落ちるが、調査時において約40個の大小の石が馬蹄形状に残っていた。ほとんどが山石で河原石は数個混ざるのみである。石を囲む様に上縁部で長さ93cm(残存)、幅124cm、深さが45cmの土壌が検出された。埋土は第2層が炭を少量含む。遺物は全く出土しなかった。中世基であろうか。

4 第3号集石遺構 (挿図64、図版20)

第3号集石遺構は32号墳の南東側墳丘斜面の墳頂部からやや下る辺りに位置する。大小5個の石が集まる。石を囲む様にいびつな楕円形を呈する土壌が検出された。上縁部で長軸100cm、短軸74cmを測り、底面に向かってすぼまってゆく。底面までの深さは最大80cmを測る。埋土は全体的にしまりが悪い。遺物は全く出土しなかった。中世基であろうか。

第7節 遺構外出土遺物 (挿図65)

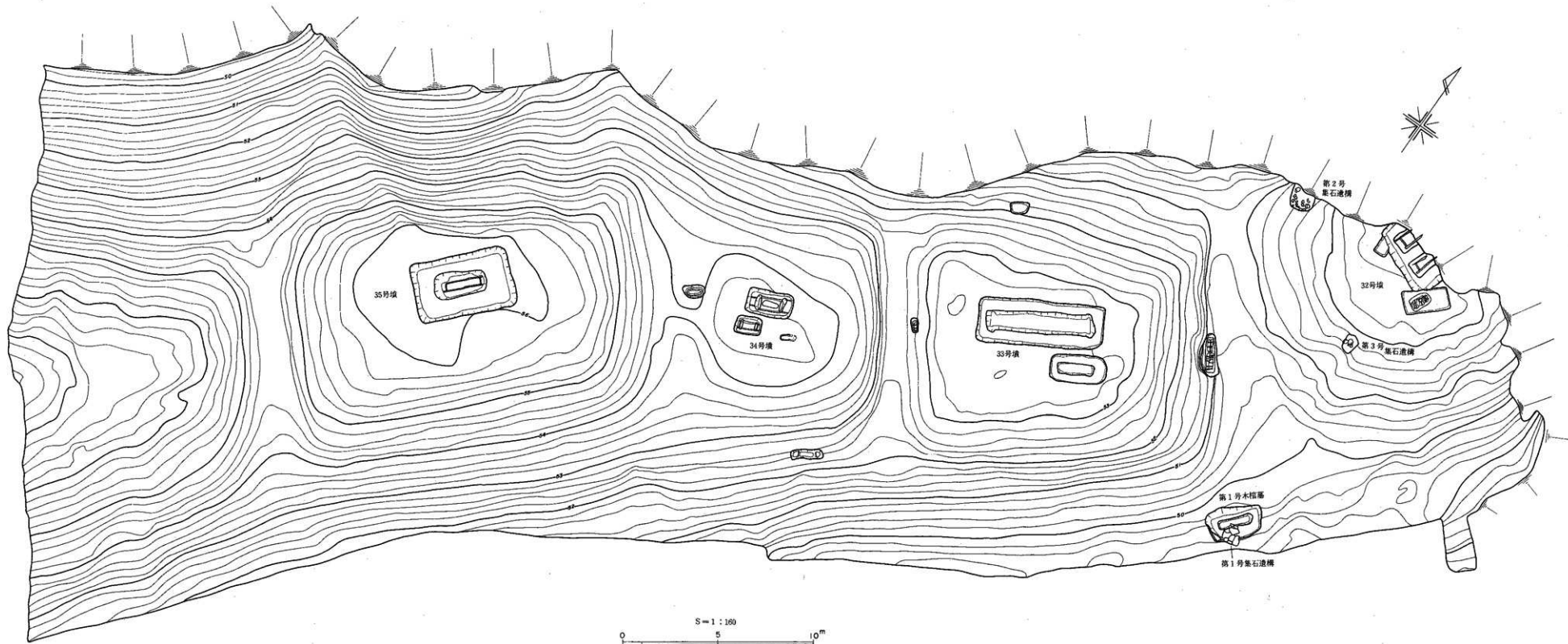
調査区内において堆積土中で古墳
その他の遺構に伴わない遺物が若干
下ではあるが出土した。須置器片3
点(Po1~3)、弥生土器の底部と思
われるもの(Po4)、土師器環底部
(Po5)である。Po1は外面にタタ
キ目をもつ。Po2は外面に同心円状
のカキ目をもつことからみて提瓶で
あろうか。Po3は底面に糸切り痕を
もつ環である。Po5は底面に回転糸
切り痕をもつ。



挿図65 遺構外出土遺物実測図

遺物番号 挿図番号	出土遺構	器用	①寸法 ②重量 ③土層 ④出土層	形状	説明	出土	地味	色調	備考
Po1 63 31	第1号集石遺構	土師器片	①11.4 ②0.4 ③0.2	扁平な底部から残わずか管筒状地に外縁して立ち上がり口縁部に至る。口縁縁部は丸くおさまる。	底部外側に回転糸切り痕がわずかに残る。他の部分は回転コナテ。	残片。少砂粒を含む。	良好	淡黄灰色	
Po2 63 31	第1号集石遺構	土師器片	①12.0 ②0.7 ③6.1	ややいびつな平底から外縁して立ち上がり口縁部に至る。口縁縁部はPo1よりわずかに膨厚し丸くおさまる。	底部外側に割離して不明だが糸切りをしたものと思われる。他の部分は回転コナテ。	残片。砂粒を多く含む。	やや不良	淡黄褐色	
Po3 63 31	第1号集石遺構	土師器片	①7.0 ②1.8 ③4.2	小壺の環。扁平な両面から外縁して立ち上がり口縁部に至る。口縁縁部はPo3より膨厚し丸くおさまる。底部内面は高くおさまる。	底部外側に垂直糸切り痕がわずかに残る。他の部分は回転コナテ。	残片。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	
Po4 63 31	第1号集石遺構	土師器片	①7.5 ②2.2 ③4.4	小壺の環。扁平な両面から外縁して立ち上がり口縁部に至る。口縁縁部はPo3より膨厚し丸くおさまる。底部内面は高くおさまる。	底部外側に割離して不明だが、糸切りをしたものと思われる。他の部分は回転コナテ。	残片。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	
Po5 63 31	第1号集石遺構	土師器片	①7.4 ②1.5 ③4.4	小壺の環。扁平な両面から外縁して立ち上がり口縁部に至る。口縁縁部はPo3より膨厚し丸くおさまる。	底部外側に垂直糸切り痕が残る。他の部分は回転コナテ。	残片。砂粒を含む。	良好	淡黄褐色	
Po6 63 31	第1号集石遺構	土師器片	①7.4 ②1.5 ③4.2	小壺の環。扁平なやや稜角な両面から外縁して立ち上がり口縁部に至る。口縁縁部はPo3より膨厚し丸くおさまる。	底部外側に垂直糸切り痕が残る。他の部分は回転コナテ。	残片を多く含む。	良好	淡黄褐色	
Po1 65	遺構外	須置器片			外面にタタキ目。内面は割離が激しいが不明。	残片	良好	外面は淡黄灰色。内面は淡黄褐色。	
Po2 65	遺構外	須置器片			外面にタタキ目。内面は回転コナテ。	残片	良好	外面は黄灰色。内面は淡黄褐色。	
Po3 65	遺構外	須置器片	①1.09 ②0.9	扁平な底部から大きく外縁して立ち上がる。	外面直縁部に糸切り痕が残る。その部分は回転コナテ。	残片	良好	黄灰色	
Po4 65	遺構外	弥生土器	①1.8 ②0.6	平底。	高麗不明	残片	良好	淡黄褐色	
Po5 65	遺構外	土師器片	①1.1 ②0.7	平底。	両面外側に回転糸切り痕が残る。	残片	やや不良	淡黄褐色	

挿表9 集石遺構・遺構外出土土器観察表



挿図66 調査区全体図

第4章 遺構と遺物の検討

里仁古墳群のうち32～35号墳の4基は新発見の古墳であり、調査の結果、保存のよい典型的な中期様相をもつ古墳の姿が浮びあがってきた。本章では里仁古墳群の遺構と遺物について若干の検討を加え、里仁古墳群の歴史的位置を模索してまとめしておく。

第1節 墳丘・埋葬施設について

1. 墳丘

調査を行なった32～35号墳はいずれも1辺14～18mの方形墳であった。近年の墳丘全体における面的な調査によって方墳の数はかなり増えてはいるが、円墳に比べて稀少な存在ではある。その数少ない類例をみると、古墳時代前・中期以前の古墳が殆どであって、里仁古墳群のように舌状丘陵尾根主軸に直交して掘り割りを掘削し、墳丘の大部分を地山整形によって形成するものである。これは、弥生時代の方形台状墓以来の方形墳丘の伝統を受けつぐものと考えられる。里仁周辺では舶載鏡二面を出土した桂見2号墳が1辺28mの方墳で、1号墳も1辺22mの方墳であり、庄内～布留初頭に併行する時期の築造とされている。^{註1} 他には湖山池南西岸吉岡周辺の丘陵尾根上に並ぶ小規模方形墳墓の存在が確認されている。^{註2} 湖山池周辺には古相の古墳が集中しており、方系墳の類例は今後も増加するものと思われる。

2. 埋葬施設

埋葬施設としては箱式石棺、箱式木棺、埴輪棺、土墳墓が検出された。

箱式石棺 灰緑色を呈する石英板状安山岩を用いており、板石を縦長に用いて深く埋め立てた小口石を両側石で挟み込む通有の形態であった。棺底には板石を敷き、石材の合せ目等には粘土で目張りをした丁寧な造りである。32、35号墳の中心主体となっており、32号墳では2棺が1墓域内に計画的に納められていたのが注目される。

箱式木棺 棺材痕跡が確認できたのは34号墳の2基だけであるが、墓壇の形状等から木棺を直葬したと考えられる土壇が5基検出された。これらを推定しうる木棺の構造から分類すると、

I類 深い小口穴を伴い、基本的に箱式石棺と同じ構造の木棺……34号墳第1・2号埋葬施設

II類 片側に浅い小口穴を伴い、外小口となる長大な木棺……33号墳第1号埋葬施設

III類 小口穴をもたない小規模な木棺……33号墳第2号埋葬施設、第1号木棺墓

に分けられる。I類では34号墳第1号埋葬施設が木棺(木槨)内に土壇があり、特異な構造となるが、小規模な埋葬施設で出土遺物はみられなかった。II類は長さ480cm、幅55cmの長大な組合せ箱式木棺で、墓壇両短壁が外側へ張り出しており、ここに小口板をはめ込む外小口構造を想定した。外小口となる棺構造の類例としては西山5号墳など倉吉市の3例が知られるが、^{註3} これらは小口部に板石を立てているものであり、西山例は割竹形木棺と考えられるなど棺構造自体は異っている。今後、この形態の類例を待ちたい。III類は木棺を納めたと考えられる土壇であり、墳底に掘り込んだ小口穴や側板痕跡がみられないことから、I類の石棺構造を模した箱式木棺とは異った組合せ木棺が推定される。

埴輪棺 32号墳第3号埋葬施設、33号墳第3・4号埋葬施設が埴輪を用いた埋葬施設であるが、

33号墳の2基は墓域に納めた遺体を覆うように埴輪片をかぶせたものであり、厳密には埴輪棺とはいえないものである。弥生土器、土師器を縦割りにした同形態の埋葬施設はいくつかみられるが、埴輪を用いたものとしては当地域において初見となる。33号墳第3号埋葬施設でみると墓域内の東端にいった埴輪片を枕として遺体を納めた上に、他古墳から移した基部を欠損する(罅付)円筒埴輪6個以上を縦割りにして、おおいかぶせている。埴輪片で蓋をしたというのが正しい表現であるかもしれない。32号墳第3号埋葬施設は特異な壺円筒埴輪(後述)を棺本体とする単棺構造であり、両端、胴部透し孔を他の円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪・塊石で塞いでいる。典型的な埴輪棺といえるであろう。現在、県内では円筒埴輪棺が25例知られており、^{註1} 今後も類例は増えるものと思われる。埴輪棺は本来従属的な埋葬施設であり、周溝内、墳丘端あるいは前方後円墳でいえば前方部に設けられるのが普通とされるが、32号墳第3号埋葬施設は中心主体でこそないが墳頂部に位置している。鳥取市津ノ井の生山42号墳では埴輪棺が円墳(径8m)の中心主体となっている例があるが、^{註2} 全国的にみても奈良県近内7号墳2号棺例を初め数例しかなく、^{註3} 墳頂第2次埋葬施設である本例も含めて特例といえるだろう。注目すべきは、これらの墳頂部埴輪棺埋葬施設の多くが、円筒埴輪の転用でなく、棺体として用いることを意図して作られた円筒棺であることで、32号墳第3号埋葬施設Po1も、同様な意図で造られた可能性を示唆するものであろう。

註1 平川誠、船井武彦氏の御教示による。

註2 「葦原長者古墳発掘調査報告書」明日の湖南を考える会、1984年

註3 真田廣幸、森下哲哉氏御教示による。

註4 寺西健一編『特別展 はにわ』鳥取県立博物館 1984年

註5 中野知照氏御教示による。

註6 橋本博文「円筒棺と埴輪棺」『古代探源』1979年

第2節 遺物について

古墳、集石、木棺墓の調査を通して鉄器、玉類、土師器、埴輪等の出土遺物を多数検出した。本節ではこの中で特に注目される、堅櫛、鋳造鉄斧、埴輪について若干の検討を加えておく。

1 堅櫛(挿図12、60 図版21、29)

32号墳第1号埋葬施設第1号石棺で18個以上、35号墳主体部石棺からは16個が出土した。堅櫛は串状に削った竹ひごを必要な本数をそろえて中央を糸でかがり、そこを中心にしてU字状に彎曲させ、横糸でかがった上部を0.8~2cmの幅でまきかためて、黒漆を塗っており、所謂「結歯式」の堅櫛である。結縛部漆膜のみが残存しており、歯部を欠損するが完形例等をもとと結縛部に対して歯部が2倍くらいの長い歯がつくものとされる。本古墳群出土の堅櫛は結縛部幅2cm前後の小型の個体(歯数16前後)、と幅4.5~5cm前後の大型型(歯数40前後)に分けられ、それぞれ歯を含めた推定復原長は6cmと12cm前後と思われる。堅櫛の用途は、髪をくしけずる「梳櫛」ではなくて「髪留め」あるいは「飾櫛」であったといわれ、人物埴輪(女子)の頭部前額に1個の櫛をさしている表現が多く確認されている。羽合町長瀬高浜1号墳第1号埋葬施設(箱式石棺)に埋葬された女性人骨(25~40才)前額部で検出された堅櫛が装着状態を示すと思われるのは、これを証明するものであり、髪留めなどの実用としては1~数個で足りたものと思われる。ところが、本調査では1石棺から16~18個の堅櫛が出土しており、岡山県金藏山古墳からは40個以上が出土した例もある。^{註3} 県内出土例(挿表10)をみても、倉吉市屋喜山9号墳で11個以上出土した例

No	古墳名	所在地	墳形・規模	出土遺構	器			(人骨)伴出遺物
					点数	大きさ(総高)	備考	
1	上下狭谷古墳	東伯郡北条町土下字狭谷	円墳 径21m	箱式石棺(A棺)	2	小型 (2cm前後)	竹ひご10本	(男性) 白玉・管玉・鹿刀
2	古塚家1号墳	鳥取市古郡家半上ノ山	前方後円墳 全長90m	箱式石棺 (3号棺)	4	中～大型 (3.5～4cm)	須部付近で出土	(男性)土師器(香 鏡・短甲・鉄剣・鉄鏃・ 鉄・刀子・針・環状鉄 器)
3	湯山6号墳	岩美郡福部村湯山字宮ノ前	円墳 径13m	箱式石棺	1	小型 (推定2cm)	御膳間に置かれた直 刀身に付着	土師器(器台)直刀・ 骨・短甲・柄外より鉄 器・土師器
4	長瀬高浜1号墳	東伯郡羽合町長瀬字高浜	円墳 径24m	箱式石棺 (第1埋葬)	1	小型 (1.2cm)	人骨頭蓋骨前頭部に 付着しており装着状 態を推定させる。竹 ひご6本	(女性)土師器(高 柄)・鹿刀
5	城青山9号墳	倉吉市和田字屋善山	円墳 径20m	箱式石棺	11	大型5 (4～5cm) 小型6 (2cm前後)	大(5)竹ひご20本 小(6)竹ひご8本 大型の板蓋の軸輪に 柄がつく	(男性)か 白玉・管玉・ガラス小 玉・鉄剣・鹿角 装刀子
6	六郎山38号墳	鳥取市久米字長谷	円墳径15m程	箱式石棺	2	中～大型 (3.5～4.5cm)	覆土中出土 竹ひご14～16本	(なし) 鉄剣・刀子
7	里仁32号墳	鳥取市里仁字岩谷大橋字村土居	方墳一辺14m	箱式石棺 (第1埋葬2号 石棺)	18以上	小型 (2cm前後)	石棺南東隅でかたま って出土? 竹ひご8本前後	なし
8	里仁35号墳	鳥取市宇美谷谷大橋字村土居	方墳一辺18m	箱式石棺	16	大型9 (4.5～5cm 前後) 小型7 (2cm前後)	石棺内に散在する。 大竹ひご20本前後 小竹ひご8本前後	(なし) 管玉・ガラス小玉・鉄 器・刀子

挿表10 鳥取県内堅掘出土地名表 (埋文センター野田久男氏作製地名表に加筆)

註4
があり出土本数が少ないものでも出土状況等から装着が考えられない例は多い。里仁35号墳も石棺内に散在する出土状況(挿図57)からは全部が装着されていたとは考えられない。従来、堅掘の副葬には単なる実用品・貴重品として納める以上に呪術的な意味あいがあるとされており、そういう性格も考えねばならないであろう。

2 鑄造鉄斧(挿図39、図版26)

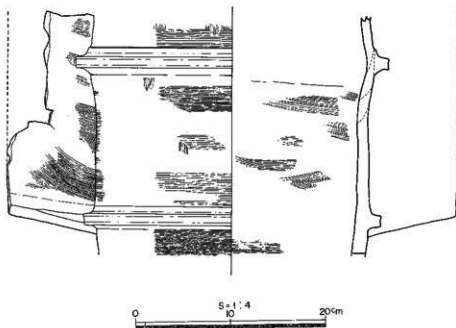
里仁33号墳では、多彩な鉄製武器、農具類を検出したが、北東側掘り割り、及び北西側埋坑から鑄造鉄斧2点が出土した。鑄造鉄斧は2点とも袋部(蓋)の一部を欠損しており、F29が残存長10.5cm、F30が残存長13.3cmを測り、F30がやや大きく、遺存状態も良い。鉄製品が鑄造品であるか鍛造品であるかは化学分析あるいは外形の特徴などから判断される。F29、30は木柄を装入する袋部の横断面が明瞭な稜をもつ梯形を呈し、鍛造鉄斧の袋部のように折り返しの合せ目がみられず、側面形は楔形で側面～刃部にかけて鑄型の合せ目の「こうばり」が残っている。鉄鑄の状況も鍛造品に比べれば少なく、層状の剝離もみられない。むしろ、F29では鑄造品特有のヒビ割れが顕著であり、これらの諸特徴は鑄造鉄斧の特徴と一致しており、形態、大きさも三国時代の朝鮮半島、日本国内出土の鑄造鉄斧に酷似している。しかしながら、これらの特徴はともすれば主観的になりやすいものであり、最終的に鑄造品であるという断定と産地同定などは現在、奈良国立文化財研究所保存処理室に依頼している化学分析の結果を待ちたいと思う。とりあえず外形の特徴からF29・30を鑄造鉄斧であると仮定して考えると、山陰地方では初めての出土であり、弥生、古墳時代において、韓国・日本合わせてみて約60遺跡出土例にすぎないという。したがって鍛造鉄斧に比べて稀少価値のある品ではあるが、33号墳では掘り割り及び埋坑から廃棄を思わせる状況で出土している。古墳時代の鑄造鉄斧は古墳から出土したものが殆どであるが、その出土状況には里仁33号墳とよく似た例が多く、岡山県殿山8号墳(周溝内)、福岡県炭焼3号墳(周溝内)、広島県地蔵堂山1号墳(土壇上縁)、奈良県兵家6号墳(竪穴式石室上)などのよう

な特異な出土状況を示しており、副葬されていたとしても他の副葬品とは区別された扱いを受けている。これは、1つには鑄造鉄斧が刃部の脱炭処理等を施さなければ靱性において鍛造品に著しく劣っており、脆いという点から破損の可能性が高く、実用的でなかったためとも考えられるが、元々壊れていたものであれば古墳まで持ち運ぶ必要もなく、古墳祭式の中で使用され、欠損したため廃棄された可能性も考えられるのではなからうか。鑄造鉄斧盛行の時期についてみると、里仁33号墳で出土した所謂「鑄造梯形鉄斧」^{註13}としては福岡県炭焼3号墳出土例が最も古く4世紀後半まで溯るとされており、主に5世紀代の古墳から出土していることから、本古墳群の推定築造時期と合致している。

3 埴輪

32、33号墳から普通円筒埴輪（以下円筒埴輪）、鰭付円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、壺円筒埴輪、壺形埴輪、家形埴輪が出土している。出土状況からみると32号墳の埴輪棺に用いられた個体は、墳丘に樹立されていた円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、壺形埴輪とは異なるようであり、33号墳は墳丘に埴輪を立て並べた形跡がみられず、埴輪棺に用いた個体は他から転用されたものと思われる。以下、各埴輪について概略をまとめておく。

○鰭付・円筒埴輪 埴輪棺に用いられた個体には、普通円筒と鰭付円筒があるが、32号墳掘り割り出土の個体には鰭付はみられない。円筒埴輪についてみると、高さは60cm前後と推定され、径は30～35cm前後でやや差異がみられる。全体を知り得る個体はみいだせないが、破片を集めて全体を窺うと3条凸帯3段で口縁部も凸帯状を呈す。透し孔は第1段に半円があり、第2・4段に逆三角形、縦位長方形がみられる。外面調整は第1段がタテハケのみで、第2段以上はタテハケ後ヨコハケを施しているが（図版31・②）、33号墳第3号埋葬施設出土埴輪にはタテハケ後のヨコハケ



図版67 里仁2号墳出土鰭付円筒埴輪実測図（鳥取県立博物館蔵）

を施さない個体もある(図版31・①)。内面はナナメヨコハケの後、凸帯裏面などにナデを施してハケメが消されている。鱗付円筒埴輪は33号墳の第3・4号埋葬施設に用いられた個体であるが、消滅した里仁2号墳でもかつて鱗付円筒埴輪が出土しており(挿図67)、里仁古墳群は、山陰で唯一鱗付円筒埴輪を出土する古墳群である。鱗付円筒埴輪の形態、調整等は鱗の付かない円筒埴輪と殆ど同じであるが、透し孔に正方形に近いものがある(挿図17、Po2)。鱗部は円筒埴輪が調整、凸帯貼り付けを終えて完成した後に、器壁に2条の沈線を入れ凸帯を切り欠いて、第1凸帯～口縁部にわたって板状の鱗部を貼りつけ、両側に粘土を補填し、その上からヨコ及びナメ方向にハケメを施している(図版31・③)。Po11(挿図19)は普通円筒埴輪として実測したが、器壁が薄いなど他の円筒埴輪と様相が異っており、楕円形円筒埴輪の可能性を示唆しておく。

○壺形埴輪 32号墳墳丘掘り割り中から壺形埴輪片を多数検出した。全体を復原できた個体はなかったが、胎土・色調・出土状況からみて同一個体と思われる破片を用いて復原したのがPo21である(挿図22、図版23)。推定器高57cmで、底径12.4cmの有孔筒状の底部からハの字状に斜め上方に開き、肩の張る胴部に径12cm前後の筒状の頸部が続き、口径29cmまでラッパ状に開く口縁部は下端に明瞭な稜をもつが、朝顔形埴輪のような凸帯は貼り付けられない。朝顔形埴輪と比べて口頭部の器壁が薄いのも特徴といえる。県内での壺形埴輪の出土例としては倉吉市小林1号墳、高鼻2号墳、向山309号墳で美作地域との交流を想定させる壺形埴輪を出土しており、小林1号墳や名和町釈迦堂古墳出土の朝顔形円筒埴輪も系譜的にはこの壺形埴輪に関係する存在であろう。他には東郷池周辺の馬の山4号墳、14号墳、北山1号墳でも壺形埴輪が出土しているといわれるが詳細は不明である。これら倉吉周辺の壺形埴輪と里仁32号墳の壺形埴輪は形態などからは直接的に連がるものではないが、両者の築造時期の差を勘案すれば、墳丘に仮器としての壺を並べるといふ認識が長く受け継がれていることが窺える。

○壺円筒埴輪 32号墳第3号埋葬施設埴輪棺本体に用いられていた個体であり、鱗付円筒埴輪に壺形埴輪が結合していれば、「鱗付朝顔形円筒埴輪」なのであるが、本例はその壺部口縁がラッパ状に開く複合口縁を呈さず、屈曲部から短く内傾して立ちあがり、端部が平坦面をなす所謂「山陰的」な複合口縁土師器壺形土器の形態をみせている。これは器台と壺の結合体である朝顔形円筒埴輪がその結合体としての性格を抽象化され、定型化したかたちとして当地にもたらされたのではなく、壺と器台の結合という本来の意味を失っていないがために生れた形態と考えられる。先述した32号墳墳丘には円筒埴輪と壺形埴輪がセットで樹立されていたと思われる事実も、これを裏付けている。加えて、里仁古墳群の埴輪は古式の埴輪の様相をよく残し、鱗付円筒の存在など、畿內的に洗練された様相が強いが、Po1は在地で生産されたことは明らかで、他の個体も在地産と考えることができる。この意味で、定型化した朝顔形円筒埴輪と区別するため「壺円筒埴輪」と仮称した。広義においては両者は同じものと考えてよいであろう。次にPo1は埴輪棺として用いるために造られたか否かが問題となる。埴輪棺として製作したのであれば鱗部をつける必要はないとも考えられるが、山陰地方には、当該期の埴輪棺と並ぶ土器棺葬として土師器壺形土器を用いた壺棺が多くみられる。Po1の壺部が「山陰型」の壺形態をとっているのは壺棺葬としての意識の表象と考えることもできよう。

○家形埴輪 (挿図24、Po30、図版22) 32号墳南西側掘り割り底において検出された。家形埴輪は古墳における埴輪祭式の中で重要な位置を占るといわれ、本来埴輪頂部におかれるものであるにもかかわらず、Po30は転落した様子もなく、掘り割り底におかれたものである。しかも削平された痕跡がないにもかかわらず上半部を欠失し、周辺に家形埴輪上屋部の破片がみられないのは、風化が著しいことと併せて、埴輪頂部におかれていたものが風化して欠損した後、掘り割り内に2次的移動をしたものと考えざるをえない。その目的は不明であるが、埋葬施設として転用された可能性もあるであろう。

- 註1 山形県漆山古墳出土例は全長約9.6mになるという。亀井正道他「日本の考古学」V 1966年
 註2 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書V』鳥取県教育文化財団 1983年
 註3 西谷真治他「金蔵山古墳」倉敷考古館 1959年
 註4 森下哲哉「屋原山9号墳発掘調査報告書」『四王寺地域遺跡群遺跡群分布調査報告書』倉吉市教育委員会 1982年
 註5 大塚啓雄「御私考」『古代研究』1 1950年
 註6 柳沢一男氏の御教示によるが、類例はその後増加しているとのことである。
 註7 平井勝「鈴造鉄弁」『岡山遺跡、岡山古墳群』岡山県教育委員会 1982年
 註8 柳田康雄他「炭焼古墳群」福岡県教育委員会 1968年
 註9 松村昌彦「地蔵堂山古墳群」『高瀬新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』広島県教育委員会 1977年
 註10 伊藤勇輔他「兵家古墳群」奈良県立橿原考古学研究所 1978年
 註11 大澤正己「馬場山遺跡出土の鋳造鉄弁の分析調査」『馬場山遺跡』北九州市教育委員会 1980年
 註12 鋳造鉄弁の性格については、かつて鉄素材の可能性を示唆されたことはあるが、(森造「古墳出土の鉄板について」『古代学研究』21・22号 1959年)、本来道具として造られたものが、その性質の特性から「珍貴なもの」としての「奢侈的色彩」をもつように至ったものと考えられており、さらに「冨弁」といった叙記的性格まで示積されている。川越哲志「弥生時代の鋳造鉄弁をめぐって」『考古学雑誌』第65巻第4号 1980年
 註13 岡崎敬「鋳造梯形鉄弁」『沖ノ島』1979年
 註14 凸帯貼り付け工程をして第1次調整と第2次調整ハケメを区別するのであれば、尾仁古墳群出土円筒埴輪のハケメ調整は、タテハケメヨコハケメ凸帯貼り付け以前のもので第1次調整となる。(図版31-①)
 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年
 註15 久保塚二朗 寺西健一氏教示による。文化財田中秀明氏提供。鳥取県立博物館保管
 註16 根鈴雄雄「イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1982年
 註17 真田康幸「高第2号墳発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1982年
 註18 森下哲哉氏教示による。
 註19 清水貞一他「塚原古墳・埴輪について」『名和遺跡群発掘調査報告書』名和町教育委員会 1981年
 註20 鳥取県埋蔵文化財センター「鳥取県内出土埴輪地名表」『特別展 はにわ』鳥取県立博物館 1984年
 註21 形態的には福岡市老司古墳の壺形埴輪などに近い。森貞次郎他「福岡市老司古墳発掘調査報告書」福岡市教育委員会 1969年
 註22 「壺門筒埴輪」の名称は伊達宗泰「円筒系埴輪の呼称と分類についての再検討」『考古学と古代史』1982年の「円筒系埴輪」から採ったが、その意味においては伊達氏の主張を牛かしていない。
 註23 東海市員「山陰地方発見の壺棺とその特色」『考古学研究』第14巻第2号 1967年

遺構名	埴輪 (最大径×高cm)	埋葬施設	出土遺物
32号墳	方墳(14×1.8)	箱式石棺2、土壇墓1、埴輪棺1	贈付壺門筒埴輪、円筒埴輪、贈付円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪、家形埴輪、整骨
33号墳	方墳(14×3.2)	箱式木棺2、土壇墓1、埴輪棺(?)2	円筒埴輪、贈付円筒埴輪、壺、鉄剣、刀子、鉄鏃、鏃、鏃、鏃、弁(鍛造、鋳造)、鋤先
34号墳	方墳(11×2.1)	箱式木棺2、土壇墓3	なし
35号墳	方墳(18×2.6)	箱式石棺1	壺、鉄剣、刀子、鏃、弁(鍛造)、ガラス小玉、碧玉製管玉、整骨
第1号木棺墓		箱式木棺	なし
第1号集石遺構			土師器杯
第2号集石遺構			なし
第3号集石遺構			なし

挿表11 尾仁古墳群調査遺構一覧表(1984)

第3節 まとめ 一里仁古墳群の歴史的位置一

里仁32~35号墳は外部構造・内部施設・出土遺物から中期的様相をもつ方墳であることが明らかとなった。これらのうち最も時期判定の資料となり得るものは33号墳北東裾で出土した土師器壺形土器Po1~3であろう。しかしながら、千代川流域因幡地方での当該期の土師器編年は確立されておらず、県中部長瀬高浜遺跡の土師器編年でみるとそのⅢ期より後出する段階のものと考えられる。また、32・33号墳出土の円筒埴輪は形態・調整の特徴からみて川西編年のⅡあるいはⅢ期に併行するものと思われる。埴輪を初めとした他の出土遺物の年代もこれら土器類の編年観と大きく矛盾せず、実年代でいえば5世紀前半代から次々と築造されたものであろう。里仁古墳群は湖山池南岸の古墳群の中で、大規模首長墳の系統とは別に在地の弥生時代墳墓の系譜をひく中・小規模古墳群として位置付けられ、南方300mの橋間1号墳（前方後円墳・90m）を頂点とする支配者層の奥津城とすることができよう。本調査において、墳頂部並部からみた、被葬者内部構造の検討などの提示された問題は紙幅と時間的制約もあり、後論に譲ることとする。また、近年の開発と破壊による里仁古墳群の現状には憂えうべきものがあり、挿表12に古墳群の現状を整理して本調査記録の結語としたい。

註1 上井珠美氏教示による。「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書」Ⅲ 1981年

註2 川西安幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年

番	古墳名	概 要		出土遺物	備 考	番	古墳名	概 要		出土遺物	備 考	
		形制(平面図)	埋葬施設					築造時期	形制(平面図)			埋葬施設
1	里仁1号墳	円・(7.5)	小塚の土壇	埴輪	381年鳥取市調査(文庫3)	23	里仁23号墳	円・(23)	-	円筒埴輪	89	盗掘穴
2	里仁2号墳	円・(-)	小塚の土壇	埴輪	382年鳥取市調査(文庫3)	24	里仁24号墳	円・(22.6)	-	-	90	-
3	里仁3号墳	円・(80)	-	-	-	25	里仁25号墳	円・(20)	-	-	91	盗掘穴、盗掘穴
4	里仁4号墳	円・(10)	-	-	-	26	里仁26号墳	円・(11)	-	-	92	-
5	里仁5号墳	円・(12.1)	-	-	-	27	里仁27号墳	円・(11)	-	-	83	-
6	里仁6号墳	円・(13)	-	-	-	28	里仁28号墳	円・(13.4)	-	-	94	盗掘穴
7	里仁7号墳	円・(13)	-	-	-	29	里仁29号墳	円・(25.7)	簡式石棺	埴輪	95	小箱材・埴輪片(文庫1)
8	里仁8号墳	円・(10)	-	-	-	30	里仁30号墳	円・(27)	-	-	96	-
9	里仁9号墳	円・(12)	-	-	-	31	里仁31号墳	円・(5)	-	-	97	盗掘穴(文庫2) 盗掘穴(文庫2) 文庫・埴輪
10	里仁10号墳	円・(9)	-	-	-	32	里仁32号墳	方・(14.7)	簡式石棺 土壇墓 石棺	埴輪・石棺 埴輪・石棺 埴輪・石棺	98	1984年調査(本報告) 調査
11	里仁11号墳	円・(20)	-	-	-	33	里仁33号墳	方・(14)	簡式木棺 土壇墓	埴輪・石棺 埴輪・石棺 埴輪・石棺	99	1984年調査(本報告) 調査
12	里仁12号墳	-	簡式石室 (石室)	-	78 本布ツクランド1号墳 1989年調査(文庫2) 調査 古墳ではない、文庫・埴輪	34	里仁34号墳	方・(11)	簡式木棺 土壇墓	埴輪・石棺 埴輪・石棺 埴輪・石棺	100	1984年調査(本報告) 調査
13	里仁13号墳	-	簡式石室 (石室)	-	79 本布ツクランド4号墳 1989年調査(文庫2) 調査	35	里仁35号墳	方・(18)	簡式石棺	埴輪・石棺 埴輪・石棺 埴輪・石棺	101	1984年調査(本報告) 調査
14	里仁14号墳	円・(-)	-	-	80 本布ツクランド5号墳 1989年調査(文庫2) 調査	36	里仁36号墳	円・(15)	-	-	102	1984年調査(本報告) 調査
15	里仁15号墳	円・(14)	-	-	81 本布ツクランド5号墳 1989年調査(文庫2) 調査							
16	里仁16号墳	円・(16.5)	-	-	82 本布ツクランド5号墳 1989年調査(文庫2) 調査							
17	里仁17号墳	円・(20)	-	-	83 本布ツクランド5号墳 1989年調査(文庫2) 調査							
18	里仁18号墳	円・(13)	-	-	84 本布ツクランド5号墳 1989年調査(文庫2) 調査							
19	里仁19号墳	円・(11.4)	-	-	85 本布ツクランド5号墳 1989年調査(文庫2) 調査							
20	里仁20号墳	円・(12)	-	-	86 本布ツクランド5号墳 1989年調査(文庫2) 調査							
21	里仁21号墳	-	簡式石室 (石室)	-	87 本布ツクランド5号墳 1989年調査(文庫2) 調査							
22	里仁22号墳	円・(18)	-	-	88 本布ツクランド5号墳 1989年調査(文庫2) 調査							

里仁36号墳は文庫3に新発見で里仁32号墳として記載されている。今鳥取市教育委員会の御好意で36号墳に変更させていただいた。

挿表12 里仁古墳群古墳一覧表 (1985・3作製)

文庫1 「改訂鳥取遺跡地図(第1分冊)」鳥取県教育委員会 1973年
 文庫2 「本布遺跡発掘調査報告書」鳥取県教育文化財団 1981年
 文庫3 「里仁1号墳発掘調査報告書」鳥取市教育委員会 1981年